

明治期の雑誌に載つたイソップ寓話 補遺

吉見 孝夫

一 前稿の補足

日本におけるイソップの受容過程を考究するための基礎資料として、先に明治期の雑誌に載つたイソップ寓話を拾い集めた結果を公表した^{注一}。前稿発表後、それに漏れた事例をいくつか見出したので、ここに補いたい。

前稿では、明治中期にはイソップの名が一般に浸透していくことをいくつかの事実をもつて示したが、その後新たに知つた事例がある。それをまず示しておこう。

前稿で、新作の動物寓話を「新イソップ」と称することが半ば慣習化していることを指摘した。この意味の「新イソップ」が文献に現れるのは明治二五年三月の佐藤治郎吉『少年書類新伊蘇普物語』(博文館)を最初としたが、そのほぼ一年前にも使用例があつた。同じ博文館発行の雑誌『日本之少年』の第三卷第五号(明治二十四年二月一五日)・第六号(明治二十四年三月一五日)に「新しいそつぶ物語」のタイトルで創作動物寓話が載つてゐる。

明治六年の『通俗伊蘇普物語』から一〇年足らずで、「イソップ」の名が動物寓話の代名詞となる程に知れ渡つてゐたことを証するものである。同じ意味で「今イソップ」とする例もある。井上幸一『明治大諷刺 増補文字反古』

(王道雑誌社、明治三四年一月)に「明治今伊蘇普物語」(目次では「明治伊蘇普物語」というタイトルで

明治の世相を色濃く反映した動物寓話を載せている。

また明治二九年一月の『面白草紙』第八号(雷笑社)にイソップと嘘とをかけて「ウソップ物語」とする笑話がある^{注二}。これもまた読者がイソップの名を知つてゐると想定しているからこそ成立する話である。

明治期にイソップ寓話を掲載する雑誌を時系列で示すと以下のようになる。明朝体は前稿で明らかにした雑誌、ゴシック体はこの小論で指摘する雑誌である。

明治一八年(一八八五)

『RÖMAJI ZASSHI』第一~七号

一九年(一八八六)

『RÖMAJI ZASSHI』第八・一〇・一一~一六・一九号

一〇〇年(一八八七)

『RÖMAJI ZASSHI』第二一・二二一・二五号

『教育小供のはな誌』第三~六号

二一年(一八八八)

三六年（一九〇三） 『DOSHISHA 文学会雑誌』第一三三号

『女学雑誌』第一三六号

二一年（一八八九） 『万年艸』第四・五卷

『婦人と子ども』第三卷第二・二二号

『女学雑誌』第一四四・一五九号

『福音新報』第四〇五号

『小国民』第一号

『福音新報』第四〇五号

『家庭雑誌』第一・二二号

二三年（一八九〇） 『J. J. も』第二卷第一・二・四号 第八・一〇号

『小学生徒之友』第九・一七・二四号

『少年園』第四六号

『女学雑誌』第二四三号

二四年（一八九一） 『女学雑誌』第二四七・二五五号

『J. J. も』第一・一・一三号

『幼年雑誌』第一卷第三・六・一四号

『小学生徒之友』第四〇・四五・四七号

二六年（一八九三） 『女学雑誌』第二四七・二五五号

民友社系『家庭雑誌』第一六・二〇号

『花の園生』第三四・三五号

二七年（一八九四） 『婦人と子ども』第五卷第五・六・二二号

『新古文林』第一卷第一・三・五号

『をんな』第五卷第八号

『少女智識画報』第一・三号

『少年智識画報』第三・四・六号

二九年（一九〇六） 『婦人と子ども』第六卷第二・九号

『少年智識画報』第八号

四一年（一九〇八） 『婦人と子ども』第八卷第六号

四二（一九〇九） 『英語之日本』第二卷第一・一・一三号

四三年（一九一〇） 『英語之日本』第二卷第一・一・一三号

三五年（一九〇二） 『羽陽之少年』第六号

二 雑誌の概要と掲載話

新たにわかつたイソップ寓話を収めた雑誌の概要とその掲載話を示す。寓話の中には、改作、翻案の程度が甚だしく、一読してはイソップと無縁に見えるものもあるが、イソップに基づくと判断される例は「」に採つた。イソップ寓話の範囲は、Ben Edwin Perryの *Aesopica* (University of Illinois Press, 1952) に含まれるのの他は、明治期までに日本に入つていて文献に所収の寓話、イソップ伝に限つた。

『エソボのハブラス』 (ESOPO NO FABVLAS) に含まれるのの他は、明治期までに日本に入つていて文献に所収の寓話、イソップ伝に限つた。

仮名草子『伊曾保物語』
Robert Thom『意拾諭言』

Thomas James: *Aesop's Fables*
George Fyler Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables*
Charles Stickney: *Aesop's Fables*

タイトルの下の括弧内に「A 17」等としたのは *Aesopica* の寓話番号である。「アリとキリギリス」で知られる寓話に該当するのは *Aesopica* では一話あり、二つの番号 (112・373) を併記した。挿絵のある場合は、括弧内に「絵」と記した。

調査した結果は、前稿で判明したものを含めて、末尾に表としてまとめた。

『教育小供のはな誌』

東京の幼談社という出版社から週刊で発行された尋常小学校生向け教育雑誌。「持主兼編輯人 山村亮作」と

あるので、社主の山村が自ら編集に当たつたのであろう。「大売捌所」として東京市内の五つの書店名が載る。主に東京周辺で読まれたものと思われる。山村については詳らかにすることができない。筆者は第三号から第五号までしか目にすることができなかつた。第三号が明治二〇年九月三日発行であり、週刊なので同年八月創刊と推定される。

以下のような寓話が掲載されている。

第三号 (明治二〇年九月三日)

1 「●御殿の鶯と藪鶯の話」 (A 352) (絵)

第四号 (明治二〇年九月一〇日)

2 「●無分別なる亀の話」 (A 230) (絵)

第五号 (明治二〇年九月一七日)

3 「○尾なし狐の話 富士見の里人君」 (A 17)

第六号 (明治二〇年九月二四日)

4 「●蟻といな」の話 (A 112・A 373) (絵)

第五号 (明治二〇年九月一七日)

5 「○蜻蛉と蟻の話 紀伊 山本 投」 (A 112・A 373)

1は藪鶯が御殿の鶯をうらやましがる一方、御殿の鶯は藪鶯に、御馳走にはありつけるが、不自由だと自身の身をかこつ話。「田舎の鼠と町の鼠」 (A 352) に似る。しかし登場動物が大きく異なるだけでなく、田舎の鼠が危険な町の生活より田舎の気まま暮らしを選ぶという原話とは趣旨が大分違う。また「世に富たる人や、貴き人は、何も不足はないようなれど、心の苦労は、なか／＼多いことであります。されば何人も、適當の満足と云ふことが、大切でありま（ママ）」という教訓を加える。

支配層には支配層の精神的負担があるのだから、「足るを知れ」と説くに至つては、「恐怖を我慢しながら快樂におぼれるよりは質素で平和に暮らす方がよい」(シャンブリ版に拠る塚崎幹夫訳注三)という原話の教訓とは大きく隔たる。このようにイソップに基づくとするのもためらわれるほどだが、かく変貌させてまで旧来の徳目に合わせる形でイソップを取り込んだとするならば、受容史のうえで注目すべきであろうと考え、ここに取り上げた。

2は亀が二羽の鶴に棒をくわえてもらい、その棒をくわえて空を飛ぶが、子供たちの悪口に腹を立て、つい口を開き落ちてしまう。「亀と鶴」(A 230)に似るが、日本風に鶴と亀の組み合わせにしたか。話柄は亀自身が落ちる原因を作つてしまふ点で、原イソップとは大きく異なる。イソップ由来と断定するにはいさか躊躇を感じずるが、1同様の理由でここに収載した。なお、本誌本号の鈴木潤吉論文注四を参照していただきたい。

5は働き者の「蟻」と怠け者の「蜻蛉」を対比させて、勤勉を説く訓話である。寓話になつていながら、イソップ寓話を踏まえて徳目を説く最初期の例として挙げておく。「投」は投稿の意。「ます」を使った口語文。

5を除き、いずれも文体は文語体だが、3の会話は「です・ます」を使った敬体の口語文。3の訳者「富士見の里人」について知る所は何もない。

『小国民』

東京の学齢館から発行された児童雑誌。明治二三年七月

月創刊で、児童向け雑誌としては最初期といえる。石井研堂(一八六五—一九四三)編集。明治二八年九月まで続く。第一号に以下の寓話が載る。

第一号(明治二二年七月一〇日)
「鼠の国会」(A 613) (絵)

鼠が猫の首に鈴を付けることを議論する、よく知られている話である。文語体を用いている。舞台を鼠の国会に置く。国会開設の勅諭が出されたのが明治一四年一〇月であり、明治二三年に開設されることは既に決まっていた。翌年の帝国議会開設を控えて、国民の注目を集めていたことであろう時事を織り込んだ工夫である。なお本文中の「国会」「代議士」という語は、議会開設以前の明治初頭から使われており、新語ではない。

『こども』

東京の少年園という出版社から発行された児童向けの月刊雑誌。編輯人榎信一郎。これに以下のイソップ寓話が掲載されている。榎には少年向け学習書の著作がある。

第二卷第一号(明治二三年二月二八日)

1 「むぐらの児」(図入)(A 214) (絵)

第二卷第二号(明治二三年三月)

2 「蝶と蟻」(A 112・373)

第二卷第四号(明治二三年五月三一日)

3 「汝に出つるのは汝にかへる。」(A 426) (絵)

第八号(明治二三年九月三〇日)

4 「獅子と黒奴」(A 563) (絵)

第九号(明治二三年一月一九日三一)

5 「樵夫と山の神 (画入)」 (A 173) (絵)

6 「猫と猿 (画入)」 (*Aesopica* はない) Stickney 本
の 88 The Monkey and the Cat と [回話] (絵)

第一〇号 (明治二二年一月一九日)

7 「鼠の会議 (画入)」 (A 613) (絵)

第一一号 (明治二四年一月一九日)

8 「蛙と鼠 (画入)」 (A 384) (絵)

9 「犬と影 (画入)」 (A 133) (絵)

第一二号 (明治二四年二月一九日)

10 「狼の失望 (画入)」 (A 158) (絵)

11 「蚕と虱の競走」 (A 226)

第一三号 (明治二四年三月一九日?) 刊記は綴じ込まれ
ていて確認できない)

12 「蝙蝠の心変り」 (A 566)

13 「尾無し狐」 (A 17)

卷号については不明の点がある。第二卷六号の翌月に
刊行されたのでは「卷」がはずされ、「第七号」となり、
以下通号で記される。これは年が改まつても変わらず、
筆者が確認した範囲では明治二五年二月発行分が「第二
五号」となつていて、通常通号にするならば、第一卷か
ら数えるはずだらうが、今見たとおり第二卷からの号数
でカウントされている。実は第二卷第一号とした号は、
神奈川近代文学館所蔵本では確かに「第貳卷第壹號」と
あるが、国際児童文学館所蔵本では「第壹卷第壹號」と
ある。他の文字面は全く同じなので、ここだけどちらか
が活字を埋め直したわけである。このように巻数には疑

問が残るが、この号より前に発行された号が確認できず、
翌月以降の号では「第貳卷」となつていて、第二巻
としておく。

内容に概ね改変は少ないが、8はウサギとカメの話で、
登場動物を変えている。1・6・7は文語文で、会話場
面だけは口語文。他はすべて「です・ます」を用いた敬
体の口語文。

『小学生徒之友』

横浜の横浜文社から月二回発行された、尋常小学校生、
高等小学校生向けの学習雑誌。明治二二年一〇月五日創
刊。第一七号に二話のイソップ寓話を載せる。「発行兼
編輯人」は小櫃守衛。小櫃には漢文学習書の著作がある。
また明治四一年頃には神奈川県立第一中学校の教員をして
いる。

第九号 (明治二三年二月五日)

1 「○熊と旅人 (前号ノヘタキ)」 (A 65)

第一七号 (明治二三年六月五日)

2 「○蟻とりべすトノ話 青木幸太郎君寄贈」 (A

112・37)

3 「○ころバヌさきノまへづゑ 野島市三郎君寄贈」
(A 224)

第二四号 (明治二三年九月一〇日)

4 「●あんどるーくるすト獅子トノ奇話 土屋大次郎
君寄贈」 (A 563a)

第四〇号 (明治二四年五月一〇日)

5 「英語独習 READING LESSON. The wolf and the

goat.」(A 157)

第四五号(明治二四年八月一〇日)

6 「●ばんち画解」(A 124)

7 「英語独習 READING LESSON. THE DOG IN
MANGER」(A 702)

第四六号(明治二四年九月五日)

7 「英語独習 READING LESSON. THE DOG IN

MANGER(Continued)」(A 702)

8 「THE VIPER AND THE FILE」(A 93)

第四七号(明治二四年九月一〇日)

8 「英語独習 READING LESSON. THE VIPER AND

THE FILE(Continued)」(A 93)

1は「前号ノ(タキ)」である。第九号に前号である第

八号の「目録」が記されている。それには確かに「熊と旅人」が含まれている。しかし現在のところ、第八号を確認するに至っていない。2・3・4の「寄贈」は投稿の意と思われる。

この雑誌は、漢字・片仮名・平仮名を特異な形で併用する。一見無秩序のようだが、片仮名は、ほぼ助詞・助動詞・活用語尾に限られる。また、助詞・助動詞・活用

語尾はほぼ片仮名書きされる。これは、漢字片仮名交じり文の片仮名の使用範囲と同じである。つまり、通常の

漢字片仮名交じり文ならば漢字書きされる箇所の一部を平仮名で書いているのである。恐らく読者の漢字理解力を考慮して、難解な漢字使用を避けたのであろう。また、通常漢字の右傍に付される振り仮名を下に割り注の形で

付けるのも余り例がない。1～4は敬体の口語文で書かれる。6は殆ど獨白で、常体の口語文。

5・7・8は英文とその訳文が左右で対照できるよう配置されている。英文には片仮名のルビで発音が示されている。この発音ルビは、*besides* に「ビサイヅ」、*is* に「イズ」と振って、「ヅ」と「ズ」を使い分けたり、*stable* に対し「ステーブル」と小文字で子音だけを示したりといつた工夫が見られる。当時の英語教育を知るうえで興味深いが、次節の「本文」では省略する。訳文は文語体。7・8の訳文は当時英語教育で用いられた「直訳」である。「直訳」とは極端な逐語訳と機械的な移し替えを特徴とし、あたかも出来の悪い自動翻訳のような日本語を産み出す。

『少年園』

少年園を発行所とする、明治二一年一月創刊の日本最初の本格的少年雑誌。山県悌三郎(一八五九～一九四〇)を主幹とする。発行所が同じである『こども』よりもは読者年齢は高い。イソップ寓話は一切掲載されていないが、イソップの伝記が掲載されている。

第四六号(明治二三年九月一八日)

「イソップの事を記す。 医学士、 関場不二彦。」(イソップ伝)

関場不二彦(一八六五～一九三九)は、東京帝国大学医科大学を卒業し、北海道医師会の初代会長となつた、北海道医学界の先駆者である^{注五}。明治二三年当時は同医科大学で御雇外国人スクリバの助手であった。本文中

に「今を距ること七年」とか「歳月を閲する」と僅か六年星霜」とあるので、明治一六、一七年頃、二十歳前の文章となる。「ライベン (Leben)」「ヲラーケル (Orakei)」「レフレックスピルド (Reflexbil)」などのドイツ語を使い、「レツシング」「マルチン・ルーテル」の名を出すことからして、ドイツ語から翻訳したものと推定される。閑場は明治一一年から里見義直に就いてドイツ語を学んでいる。孔子や莊子の名を引くのは閑場の付加であろう。イソップの漢字表記は近世は「伊曾保」、明治期は「伊蘇普」が通例で、中国では「意拾」「伊婆菩」が見られる。それを閑場は「以蘇菩」という他に例を見ない表記を用いる。文体は文語体。

この閑場のイソップ伝に続いて「盤峰樵者」なる人物による五二字の漢文が載る。寓話でもなければ、イソップ伝でもないが、当時のイソップ理解の程度をさぐる参考になるので、あわせて次節に収載しておく。盤峰樵者が如何なる人物かは不明である。閑場同様に「以蘇菩」という表記を用いている点から推すと、閑場自身かもしれない。

『花の園生』

臨済宗妙心寺派の信徒団体、仏教花園婦人会の月刊機関誌。明治二十四年二月創刊。初代会長は伏見宮文秀女王。当初は東京で発行されたが、ここに引用する第三四・三五号当時は京都府内の花の園生社発行。この二つの号それぞれにイソップ寓話が二話ずつ載っている。

第三四号（明治二六年一一月）

「伊蘇普物語 晚翠禪史訳」（目次では訳者は「桜外生」とある）

第三五号（明治二六年一二月）

- 1 「土鼠と野牛の話」（A 5353）
- 2 「盜賊と雄鶏の話」（A 1223）
- 3 「鳩と鶯の話」（A 4）
- 4 「鳩と鳥の話」（A 202）

「伊蘇普物語 桜外生訳述」

第三四号の訳者が本文では「晚翠禪史」とある。土井晩翠（一八七一～一九五二）は年譜によると、旧制第二高等学校生であった明治二六年七月から「晚翠」の号を用いているようであるが、これと「晚翠禪史」との関係は不明である。また目次では「桜外生」とあり、これと「晚翠禪史」が同一人物なのか、どちらかに誤記があるのかも明らかにできない。

いずれも文語体で記されるが、4の会話は口語体。

『少文林』

大阪の文林会発行。「発行兼編輯人」は中村丈太郎。歴史上の逸話の他、地理・数学・理科なども含む学習雑誌。創刊は明治二五年二月か。月一回または二回発行。

一つだけイソップに基づく話が載る。

第二卷第五号（明治二七年三月三日）

（◎蛙の演説 久津見蕨村）（Aesopica にはない。James 本の 172 The Boys and the Frogs と同話）（絵）久津見については一切不明である。

『少年新誌』

東京の少年新誌社から発行された月刊少年雑誌。明治三〇年七月創刊。第一号の編輯人は井出光治だが、ここに引用する第二・三号は長田致孝、第四号は長田致行。

「人物養成を以て中心とし登載の事項凡て此一点に統合す」「高等一年より中学二年迄の程度を標準として専ら学校の課程訓練と一致連絡せんことを期す」と謳いあげ、精神修養と学科学習の資となることをめざす。贊助員には、時の文部大臣蜂巣賀茂韶、学習院長近衛篤麿など教育界の権力者、権威者が並ぶ。

以下のとおり、イソップ寓話を掲載する。

第二号（明治三〇年七月）

1 「伊蘇普物語註解 同人 (S. F.)」 (A 133)

第四号（明治三〇年九月一三日）
第三号（明治三〇年九月一三日）
2 「イソップ物語（意訳及註釈）」 (A 155)

3 「イソップ物語註釈及意訳」 (A 10) (絵)
4 「貪欲太郎と嫉妬之助の話」 (A 580) (絵)

1・2・3は英語學習の記事である。英文はいずれも当時英語教科書として使用されていたStickeyの*Aesop's Fables*から採っている。「意訳」は通常の和訳、翻訳をいう。「直訳」に對しての語であろう。直訳とは當時外國語教育で採用された方法で、日本語として不自然になることも厭わずに、極端なまでに逐語訳を徹底することをいう。「註釈」部分は、本稿の目的とは無関係なので、次節の「本文」では省略した。

4は登場人物、舞台を日本に置き換えた翻案。

いぢれも文語体だが、1・2・3の会話は口語体。

『羽陽之少年』

山形市の羽陽少年社から発行された明治三五年七月創刊の月刊少年雑誌。発行兼編輯人は吉田左膳。吉田は『山形教育雑誌』の編輯人でもあり、山形の教育行政に携わっていた人物と思われる。第六号にイソップ由來の話が掲載されている。各地でこういった地方雑誌が発行されたことと思われるが、現在では探索が困難である。その意味ではこの例は貴重である。作者「霞山子」については全く不明。

第六号（明治三五年一二月二五日）

「かうもりの二心 霞山子」 (A 566)

『少女智識画報』

東京の近事画報社から出された明治三八年九月創刊の月刊雑誌。画によつて「少女の智恵を増し智識を啓く」（緒言）ことを謳う。編輯は石丸敏一。美術書の著作がある石丸の編輯だけに、他の少年少女向け雑誌とは異なり、挿絵は水彩画で、カラーで印刷されている。各話見開き二ページに收める。一ページが文、一ページが絵。文が先の場合も、その逆もある。これは、文と絵とで印刷方法が異なるため、文だけの紙、絵だけの紙と分けて印刷されているからである。調べた範囲では、これに三話イソップ寓話が載る。

第一号（明治三八年九月一日）

1 「狐と鶴のお伽話（イソップ）」 (A 426) (絵)

絵は尾竹竹坡（一八七八～一九三六）によると思

われる。

第二号（明治三八年一〇月一日）

2 「●黄金の鶏卵」（A 87）（絵）

第三号（明治三八年一月一日）

3 「●鷺と鳥の智」（A 490）（絵）

絵は尾竹竹城。

『少年智識画報』

『少女智識画報』と同時に同じ近事画報社から創刊された月刊雑誌。『少女智識画報』同様に、画によつて「少年の智恵を増し智識を啓く」（「緒言」）ことを謳う。編輯はこれも石丸敏一。やはり、収載される絵は他の少年雑誌とは一線を画すことができる。各話見開き二ページに收まり、文と絵が一ページずつであるなど、体裁は『少女智識画報』と全く同じ。これに六話、イソップ寓話が載る。

第三号（明治三八年一月一日）

1 「(十一) 鷺と矢（お伽話）」（A 276）（絵）

第四号（明治三八年一月一日）

2 「(十二) 狼と鶴」（A 156）（絵）

3 「(四) 太陽と北風」（A 46）（絵）

第六号（明治三八年一二月）

第六号は明治三九年二月発行のはずだが、奥付けには「」うある。

4 「(三) 樫夫と河伯」（A 173）（絵）

第八号（明治三九年四月）

5 「(三) 獅子の婿入」（A 140）（絵）

6 「(四) 兔と亀」（A 226）（絵）
『英語之日本』

東京の建文社から発行された月刊の中学生向け英語学習雑誌。明治四一年八月創刊。主幹は佐川春水（正則英語学校講師。一八七八（一九六八）・秋元俊吉（ジャパンタイムス記者。一八八四？）。明治四二年から四三年にかけて、イソップ寓話の英文、その和訳、註釈が連載されている。以下のとおり。

第一卷第一号（明治四二年一月一日）

「(◎)イソップ物語詳解 在外国語学校 長谷川元吉」

1 The Wolf and the Lamb. (A 155)

第二卷第二号（明治四二年二月一日）

「(◎)イソップ物語詳解 在外国語学校 長谷川元吉」

1 The Wolf and the Lamb. (A 155)

第二卷第三号（明治四二年三月一日）

「(◎)イソップ物語（訳註） 在外国語学校 長谷川元吉」

3 III.— The Dog and His Shadow. (A 133)

第一卷第四号（明治四一年四月一日）

「(◎)イソップ物語詳解 長谷川元吉」

4 IV.— The Lark and Her Young ones. (A 325)

第二卷第五号（明治四一年五月一日）

「(◎)イソップ物語詳解 東京外国语学校 長谷川元吉」

4 IV.— The Lark and Her Young ones. (A 325)

第二卷第六号（明治四一年六月一日）

〔◎イーソップ物語詳解 東京外国语学校 長谷川元
吉〕

5 V.— The Drum and the Vase of Sweet Herbs.
(*Aesopica* にせなご) James Townsend 木ノ瀬
なご)

6 VI.— The Wolf and the Goat. (A 157)

7 VII.— The Two Frogs. (A 69)

第一卷第七号 (明治四一年七月一曰)
〔◎イーソップ物語《訳註》 東京外国语学校 長谷
川元吉〕

7 VII.— The Two Frogs. (A 69)

第一卷第八号 (明治四一年八月一曰)
〔◎イーソップ物語詳解 東京外国语学校 長谷
川元吉〕

8 VIII.— The Lion and the Mouse. (A 150)

第一卷第九号 (明治四二年九月一曰)
〔◎イーソップ物語詳解 東京外国语学校 長谷川元
吉〕

8 VIII.— The Lion and the Mouse. (A 150)

9 IX.— The Mouse, the Cat, and the Cock. (A 71)

第一卷第一〇号 (明治四一年一〇月一曰)
〔◎ふそくの物語詳解 長谷川元吉〕

10 X.— The Fox and the Grapes. (A 15)

11 XI.— The Crab and Its Mother. (A 322)
第一卷第一一号 (明治四一年一一月一曰)
〔◎イーソップ物語詳解 長谷川元吉〕

12 XII.— The Wolf and the Crane. (A 156)

13 XIII.— The Axe and the Trees (*Aesopica* にせな
ご) James 木ノ瀬 59 The Trees and the Axe と回説)
14 XIV.— The Ants and the Grasshoppers. (A 112 · 373)

第一卷第一三号 (明治四一年一二月一曰)
〔◎イソニア物語詳解 長谷川元吉〕

14 XIV.— The Ants and the Grasshoppers. (A 112 · 373)

15 XV.— The Frogs Who Asked for a King. (A 44)

16 XVI.— The Ass in the Lion's Skin. (A 188)

第一卷第七号 (明治四三年六月一曰)
〔◎イーソップ物語詳解 長谷川元吉〕

17 XVII.— The Mice in Council (A 613)

横書が一段組みで、英文と和訳が対照で並んで左
右に並べられ、下に註釈を付ける。各回見開き11ページ。
英文は『少年新説』同様に Stickney の *Aesop's Fables* が
採ってある。Stickney 本の第一話から第一七話までを、
掲載順そのままに載せる。和訳は敬体の口語文。註釈
は「詳解」とある。おり詳細であるが、連載が進むにつ
れて量を減らしてくる。「註釈」部分は、本稿の目的と
は無関係なので、次節の「本文」では、必要な場合を除
き省略する。

1 4 7 8 11 14 15 のよへん、一一つの号に涉
つて掲載される場合がある。17 は途中で終わっている
が、以後の号にも続きは見当たらない。15 の続きが半年

横書き二段組みで、英文と和訳が対照できるように左
右に並べられ、下に註釈を付ける。各回見開き二ページ。
英文は『少年新誌』同様に Stickney の *Aesop's Fables* から採つてゐる。Stickney 本の第一話から第一七話までを、
掲載順もそのままに載せる。和訳は敬体の口語文。註釈
は「詳解」とあるとおり詳細であるが、連載が進むにつ
れて量を減らしている。「註釈」部分は、本稿の目的と
は無関係なので、次節の「本文」では、必要な場合を除
き省略する。

後にやつと掲載されていることと考へると、長谷川に何か事情があつたかと想像される。

なお、明治四二年一二月発行号が第一三号となつてゐるのは、同年一月一五日に「定期増刊春の巻」が第一二号として刊行されているからである。同様に翌四三年三月一五日に「定期増刊春の巻」が刊行されているので、同年六月発行号は第七号となつてゐる。

訳者長谷川元吉については調べがついていない。

三 本文

前節に取り上げた雑誌掲載話の本文を以下に示す。引用に当たつては、以下の方針に従う。

○ 漢字・仮名は原則として原文どおりとする。
○ 注意すべき箇所には*を付し、末尾に注記を加える。

○ 『少年新誌』『英語之日本』の注記におけるStickney の *Aesop's Fables* は明治三五年刊の岡崎屋版に拠る。

○ 『英語之日本』は原本に倣い、横書き左開きとする。

『教育小供のはな誌』

第三号（明治一〇年九月三日）

● 御殿の鶯の話
むかし或る大名の御殿に、鶯が飼てありました、てふど春はるの事で、お庭の梅の花も見事に開き、四方には小鳥の声も麗らかにきこへて、御手飼の鶯と、さへずりあふて居りまし

た、然るに一羽の鶯は、忽ち籠の鶯の傍へ来り、話を致すには、さてもお前は仕合のよき事だこの様な美しき籠に養われ朝晩申分なき、すり餌の御馳走に腹を満し、貴きお姫さまに愛せらるゝは誠に浦山しい事だ僕も声がよかつたならば、君の様なよき仕合で、あるだろうと申しますと、籠の鶯の申すにはなるほど君の言葉も、尤もだが、なかなか楽しい事は少しもない、僕などはいかさま美しき籠に住み、おいしい餌は沢山だが、朝から晩まで、此の籠の外へは出られず、少し休まふと思ふと、此鶯はさへずらぬ、など小言を云われ、其究屈なことは、例へようもない程だ、反て君の自由こそ、羨やましい事であると申したそうです、世に富たる人や、貴き人は、何も不足はないようなれど、心の苦労は、なか／多いことあります、されば何人も、適當の満足と云ふことが、大切であります（ママ）

（挿絵）

第四号（明治一〇年九月一〇日）

● 無分別なる亀の話
海辺の沢に、年久しく住める亀あり、二羽の鶯も、とき／＼爰に来り、遊びけるゆべ、亀とは大に懸意になれり、或時亀は、鶯に向ひて云ひけるに、君達は翼あるが故に、高く空中を飛び行き、広き都も一目に見下し、面白きことありますよう、友だちの好みに、何卒僕を伴ひて、一度び空中の遊を、なさしめ玉へと云ふに、二羽の鶯は口をそろへ、それは不良見なり、我々はあるを以て、飛ぶことは自在なれども、君の如く、久しく水中に在りて、水底の名所を見物すること能は

す、これは各自の性質なれば致し方なし、思ひ留り玉へといふことにしておまへ
ど亀はなか／＼承知をせねば、鶴も甚だ迷惑ながら、然らば併れて参らんとて、一本の棒を、亀にくわへさせ、いかようの事あるも、口を開く可らずとて、堅く警めおき、二羽の鶴は、棒の両端を喰へ、空中高く舞ひ登れり、程なく町の入口に至るに、多勢の小供が遊び居り、此在様を見ていろ／＼、悪口を云ひて、亀を置りければ亀は、くやしさ堪へ難く、腹立ちまぎれに、鶴のいましめを忘れ、小供等を云ひまかさんとて、思はず口を開きけるに、身は忽ち棒を離れ、大地に落ちてこな／＼に、甲も抜けて死たりとぞ、誰も為すまじき事を、無理になさは、この亀の如く、直ちに身命を失ふにいたる、慎むべ

きつね
狐はあの様な長い尾を担いで歩くが何丈の功能があるか誠に無益な邪魔者を狐はよくく抱して居ると思ふに違は有ません夫故に私は皆さんに忠告致し升皆さん私が私の論に従つて利益を得今日より断然無用な尾をきつて開成風となり玉は必ず必ず我々の尾を切れとは申されますまい此の言葉の終らぬ中にかの尾なしの狐はコハ叶はじと尻尾を捲(デハナイ)狐鼠々々として逃げ去れり

里人云ふはフエイルブス*(ママ)とて西洋の作話にて我国のも、桃太郎の如き者なれどかの國の教育の文の中に見えたれば少くお小供衆の為に訳し出しめ只今の世の中は言論自由とか申し皆々御勝手な言を喋舌玉ふ故に童幼諸君は親教師の外に無闇と人の云ふ事を信じ玉ふな

傍線は原文では左傍にある。

第五号（明治二〇年九月一七日）

●尾なし狐 在横浜 富士見の里人訳
たとひをのこ
抜け出しを残すとも頭丈は助かりしよど喜びてある掛け眼を
抜け出せし狐あり鳴さりながら森の中を漫歩する時は
ほのかきつねのををひそひらわらおあれな
みがすの狐の己が尾なきを見て窓かに笑ふ者多く己も何にとな
く我姿の哀れ氣なるに太たくはぢらひてかの掛け眼にて死せし
ならばと思ひしが狡猾は狐の持前はからず計を案じ出
あるひおののなかまつりあつことは案したが
し或曰己が仲間をやる森に集めて己が云ひ出す言葉に従ふ
べき条件を結ひけり
狐「諸君は私は私が今尽力致します此狐社会の自由と安樂
に付いて一向に考がないと思ひます私も自分が自身此
事を実際に試みて来なければ私はも実は信用は致しません
事ありま升併し只今人間社会で考へて見たなら必ず

時しも、冬のいままでとなり、稻はこと／＼、茹りとりければ、いなごどもは、今迄自由に食ひ居し、食糧を失ひ、見苦く死せしが、一足のいな／＼も、大に饑ゑつかれ、心の中に思ふよふ、蟻の家には、貯も多ければ、彼を頼みて、身を寄せんとて、しよほ／＼と、蟻の住家にいたり、ひたすら頼みけるに、蟻の答へて云ふよふは、われ／＼は暑き夏の日も、いとわず、働きしゆへ、かく貯へも、多けれど、君などは、朝夕甘き、露を飲み、

おいしき稻に、腹を満し、働きもせずして、飲食せしゆへ、見苦しくも、今日の饑に、臨みしなり、そのよふなる、不精るもの
は、決して養ふ能はずとて、穴の外へ逐出しければ、いなごは、
たぢまちうへじにありあり、忽ち餓死して、反つて蟻の餌じきと、なりしとぞ

(挿絵)

第六号
（明治二〇年九月一四日）

かず
○蜻蛉と蝶の話
みま
紀伊
ぞんじ
山本
投

賢き虫もあり愚かなる虫もありますがこの中にも
さかれ誠とに賢き虫であります凡ての虫は冬はみな土の中
にて生活を遂げる者でありますゆへ彼の蟻は炎天の夏の暑さ
も苦とせずして朝の未明より夕暮まではたらきて食物をお
のれの住家に運び貯へ何時冬が参ろふがさしつかへのなきよふ
に致して置ますこれに引かへ蜻蛉と云ふ虫は愚か者であります
すゆへ其日一饑たときには有会ふ食物に腹を満たし一向
食物の用意を致さぬゆへ冬に至ると忽ち饑へござて死にます
る人間でも斯の通りにて若しも蜻蛉の如く貯へと云ふことを
せぬならば不幸にして病気に罹るとき医師の薬も受ることが
できぬばかりでなく忽ち食物に事をかきて終には死にます
る人を警めて斯の如くはたらくとの事であつぶと思ひますさ
れば皆さまも正しく勉強して蟻に恥ぢない様に御注意が肝

第一号（明治二三年七月一〇日）

を伸べ、跋扈跳梁の勢を張らんとの議を決せんとせり。多くの鼠、諸国の中より代議士となりて出で来り、米庫を以て、鼠の社会に国會を開き、猫の害を防ぎて更に鼠權の間討論したれども、多數の賛成を得るほどの名論も出でず、皆殆ど困じ果てしが、一匹の年少き鼠ありて、末席より起立し、手をあげて「議長」と呼び、発言の許しを請へり。議長は之に発言を許せしが、やがて此の少壯の鼠は、意氣揚々と説き出して曰く「拙者開会以来老鼠諸賢の論議を聴くに、皆陳腐の御論のみにて、一ソも取るべきものなし、是れども、敢て一議を提出し、以て諸君の賛成如何を試みんとす。抑も彼輩の吾が社會に危険なるは、敢て彼奴の身も、體動作を以て比べれば、寧ろ我々こそ却て猫より勝るなれ。故に、彼れ我れを逐ふも、我れ巧に穴に逃げ込むこと難きにも曾て音を生ぜず。故に、我々夜会を開き踏舞を催し相楽あらず、唯恐るべきは彼奴の足なり。彼奴の足は鋭き爪を有しむに当り、近く背後に敵の忍び来ることあるも、之を知るにし、其の蹤の柔かなること真綿細工の如し、是を以て歩む由なし。其捕ふる所となるも亦宜ならずや。拙者此に於ても曾て音を生ぜず。故に、我々夜会を開き踏舞を催し相楽考へるに、若し猫をして其頸環に鈴を附せしめば、彼歩むに必ず鎗然の聲を發すべし。斯くすれば、如何に真綿に均しき足なるも、其近くときは忽ち其音を知るを得て、我々鼠

社會は無事太平なること疑ひなし、諸君以て如何とする
と、其議論は、全く殆ど一致の妙計なりと賞
勢にて拍手喝采し、賛成を表し至極の妙案妙計なりと賞
せり。

事の出来ぬばかりじゃない、喰ぐ事も出来ない子。

然るに議員の中に一際目立し老鼠あり、席を起ち「今少
壮なる某君の提出せられし議案、一応承はれば異議す
べき点なき様なれども、一体誰が猫に鈴を懸けて呉れますか、
其辺の事承はりたし」と冷笑しつゝ質問せしかば、他の鼠も亦心付き、「成程、是は実行し難き議論なり、猫に鈴を懸けるは別に委員を撰むに及ばず、彼の発議者自身に往きて猫に鈴を懸け来れど、口々に攻撃せしかば、彼の鼠赤面して、一言の答辩もなく、スゴーと議事堂を退きたりと。
此の鼠は猶ほ其のたるを知らざるものなり、経験も更に無きものなり、妄に畠水練の議論を持出せしなり、他の笑ひを招ぎしも理りなり。而して此の国会は遂に決議に至らざりしゆゑ、今猶何国にも鼠の取締をなし其跋扈を防ぐは猫なること、読者諸子も知る所なり。

(挿絵)

第一卷第一男明治三年用田（ありたう）

蟻は毎日勤ひて色々な食物を貯へ、春の陽気なる日にも少しも怠りません。蝶は之を見て大変笑止げに申しますには、『君は實に馬鹿げた者である、此春の日の花笑ひ鳥歌ふ陽気な時に、見悪き風をして勤ひてばかり居るのは、實につまらないものである、我などは奇麗な衣裳を着て此處彼處の花園などを飛び歩ひて、實に愉快の事だよ』と威張まわりて居りましたが、やがて春過ぎ夏去りて間もなく雪降る冬の日となりましたが、蟻は穴の中に入りて何不自由なく生活して居りましたけれど、蝶は食物の貯へなくて遂に飢え死んでしまひました。夫れだから人も同じことです、若ひとつに勤ひて置かねば、蝶の飢死の様に仕方のないよふになります。

第一卷第四号 (明治三年五月三日)

『「ども』
第一卷第一号（明治二三年二月二八日）

むぐらの児父に向ひて、「とさん、私は何でも見分けが付きます」と云ふゆゑ、其の父試みに乳香（形は石に似て香りある物）の塊りを出して、「これは何ぢや」と問へり。児の曰はく「石でございます」。父笑らひながら、「オヤ、おまへは見る

狐は獸の中にて随分狡猾な奴でありまして、時々は虎の如き猛獸を後ろに従へる所謂虎の威を振りて揚々と自得する如き獸ですが、或る時鶴を饗應せんとて招きましたが、其實は鶴を困らせんために呼んだのですから酒を大皿に入れて出しましたゆえ、成程鶴は困りました。狐等は舌を皿に入

れ嘗めますけれど、鶴は長き嘴にてコツ／＼とやつて見ても、中々飲めませんから、満坐の中に笑を受け、赤面ながら帰りましたが、鶴は口惜しくてたまりません、何時かな返報してくれんと思ふて居りますうち、不図一羽の鶴を得ましたから、之を以て狐を呼ばんとて、使を遣はし申しますには、今日は幸ひ鶴を獲ましたから、一盃を進ぜんと思えれば、お出の程を願ひますとて招きましたが、其実は矢張恥辱を雪がんためでした。狐は何の気もなく喜びながら来ましたが、日は性來の好物たる鶴肉の下物なれども、是れとて香ひばかりにて、鼻をむかつかせて居ました。鶴は微笑みつゝ嘴を徳利の逆中に突き入れて、左も甘まさうに飯マさんなり食つたり為ますのを、狐は仕方なく、只眺めて居るばかりにて、非常の恥辱を受けて、狐鼠ヨウヌと逃げ帰つたと云ふことですが、世間は皆此の如きものにて、我人をそればマ我人を譏る恰かも天に向つて唾ツバ吐く様なものです。

(挿絵)

第八号 (明治二十三年九月三〇日)

獅子と黒奴

獅子は獸王と申し、百獸の中何よりも力の強い怖ろしい動物であります。黒奴と云ふのは、皆さん御ぞんじであります。アフリカ又は南アメリカ杯に居る色の黒い野蛮人で、むかし西洋人は、牛か馬の様に之を売買して農業又は其他様々の事に使うものであります。

此の獅子と黒奴に就いて一つの話が御ざります。或人が余り非道に黒奴を使ふたものですから、其の黒奴は苦しさに堪へずして逃げました。逃げて山の中に這入りました所が一足の獅子に出会ました。其の恐ろしさ！ 身の毛も竦立つ様に覺えました。

黒奴は、逆も逃れぬ所と覺悟して、身を震はしながら道の傍らに縮まつて居りました。然るに獅子は其の黒奴に掛りまして、其の足を見たれば、足うらに大きな刺がさりてあります。これは多分踏ぬきをしたのであります。

やがて黒奴は其の刺を抜いて、水で洗うて遣ました。直に直りました。是より獅子は黒奴のために親切な友達になりました。黒奴は獅子と共に住ひまして、凡そ五六ヶ月暮しました。其の間獅子は、色々な食物を持來りて黒奴に与へました。

その後黒奴は終に其の主人に捕はれました。「此奴は主人の恩を忘れて、出奔したる大罪人だから、獅子に喰はして殺して仕まへ」と言ひまして獅子の園の中に投込みました。其獅子、は、五六日前から食物を与へんで、腹をへらさして置いたのであります。此の無惨なる死刑を見物しようと思うて、近所の人々は園の周囲へ黒山の様に集まりました。誠に憫れな話でござります。

しかるに其の獅子は黒奴を食ひません——不思議です——却て嬉しそうな顔をして、黒奴の傍へ参りました。よく／＼見れば山に居た時中よく暮して居た友達であります。そこで

黒奴は、なれ／＼しく獅子と遊びまして其の背に跨つて、威張つて見せました。主人を始め見物人は、一同此の有様に驚きあきれて、其の訳を尋ねました。依て黒奴は委しく其の次第を話しましたれば、主人も之に感じて終に黒奴を縦しました。

(挿絵)

第九号 (明治二十三年一月一九日)

(挿絵)

ある樵夫と山の神。
ある樵夫が山へ木を伐りに行き誤ちて溪川へ斧を墜しました。商ばい道具を亡くすると其日から妻子を養ふ事が出来ませぬゆゑ、どうしたれば佳いかと歎き悲んで途方にくれてみました。其處へ不思議に山の神さまが出で来たりて「何を其やうに悲んであるかと」(マコ)問はれますから、斧を墜した事を話すと、山の神は其ま、川の中へ入りて金の斧を拾ひ上げて「其方の墜したのは是か」といひます。「其やうな立派のではござりませぬ」といふと、又銀の斧を拾ひ上げて「是か」「それでもござりませぬ」といふと、今度はほんとうに樵夫の墜した斧を拾ひ上げて呉れました。樵夫は涙を流して礼をいふと、山の神は其正直を褒めて、金の斧も銀の斧も残らず樵夫に呉れました。

樵夫は家へ帰りて此事を仲間の者へ話しましたれば、皆非常に羨しがりました。其中一人の欲深い樵夫がソツと其山へ行き木を伐るふりをしてわざと斧を溪川へ墜し悲しきうにそら泣をしてゐました。

案の如く山の神が出で来りて斧を墜したときいて、川の中へ

入りて彼の金の斧を拾ひ上げて「これか」と尋ねました。欲深い樵夫は立派な金の斧を見てほしくてたまらず「ア其こそ私の墜した斧でござりますと」(マコ)虚言を言ひますと、山の神は「其方は虚言をつく不届者かな」といひて、其儘何處へか行つてしまひました。欲深い樵夫は金の斧を貰はない計りでなく自分で斧迄も墜し損となり、今度はほんとうに悲みながらスゴ／＼家へ帰りました。

(挿絵)

(挿絵)

第一〇号 (明治二十三年一二月一九日)

同じ家に畜はれてゐる猫と猿とがありましたが、二足ながら中々わるいやつでありました。或日つれだちて何か佳いものがなかと其處等を探しまるうちに、火鉢の灰の中に栗が入れてあるのが眼につきました。「猿吉さん佳いものがあるぜ。是でまづけのの巣めしに有ついた」と猫が言ふと、猿が「お玉さんそれを引出すにはわたしの手よりかお前の手の方が都合がよいからどうか頼むぜ。みんなとり出して半分わけにしよう」玉はやけどしながら「ツー引出して「さあ是からが半分わけだ」と此方を向いて見ると、何時の間にか猿めがみんな食べてしまひ、頬を脹らして頻りにムガ／＼させてゐました。併し盗み物だから玉も大きな声をして怒る事が出来ませんであつた。じぶんに悪いことをして弱点があればとかく人にばかにせられます。

ねづみ くわい
鼠の会議。

てんじやう かたすみ およ ねづみあつま なに さうだん はじ
天井の片隅に凡そ二十匹ばかりの鼠集りて何か相談を始
めました。其中首頭と見える一匹の白鼠が立上りて「みなさ
んを呼び寄せたのは、外の事でない。我々は此通り眷族も沢
山あり、毎日旨い物を食べては楽しく、遊び、何一つ不自由は
ないが、只心配なのは、この飼猫のあの玉助。彼奴折々やつて
来、我々仲間を苦め、わたしの孫のお忠も可愛やきのふと
うべく喰はれて仕まふた。どうかして敵玉助めを、首尾よ
く退治する工夫はあるまいか。皆さん良い謀を聞いて下さ
れ」と申しました。

何れも顔を見合せるばかりで、チューとも答ふる者がありま
せぬ。其中に忠八といふ肥太ツた一匹の黒鼠が大声を上げて
「諸君所詮あの玉助めを殺すの退治するのといふことは出来ぬ
話だ。夫よりも彼奴が何時来るといふことさへ分れば逃るが
よい、遁げるは何より容易い事ではないか。僕に良い工夫があ
るから聴き玉へ。彼奴の頸へ一つの鈴を縛りつけて置くのだ。す
ると彼奴の歩くたびに鈴がチリン／＼と鳴る、我々は其音を
聞きつけると、直に穴へ隠れば宜い。何ど是より良い謀は
あるまい」と脣喰ひ反してさも慢さうに演説を為ました。
皆々手を拍つて感心し、最早心配する事はない、勇み喜
んでみると、一匹の鼠がフト不審を起し、其鈴をど
うして縛りつける事が出来るか」忠八鼠此間に答へる事が出
来ず「サアそれは」と言つたばかり、どうべく自慢の謀が無
になりました。口に立派に言はるゝ事も實際に行ふことが出
来ずば、益にたちませぬ。其事は少しの価値もありません。

(挿絵)

第一号(明治一四年一月一九日)

かはす いち おほかはう
蛙と鼠。

意地の悪い大蛙がある時鼠と連立ちて旅をしました。

大蛙はポイ／＼と跳べば鼠はチヨコ／＼と走る、溝を跳びこえ
叢を通りぬけて、段々と歩いて行くうち、一つの池の隄を出
ました。鼠は游ぐことが出来ませぬ故「隄を回らうではない
か」といひましたが、大蛙は中々承知しませぬ「隄を行つては
余程な廻りになるから、矢張り池の中を行かう、其代りにはお
まへを背負つてあげやう」といひました。鼠はどうも不安心に思
ひ「若し墜落たらば大変」といふを「此處にある葦条で互の足
を繋ぎ合せて置けば大丈夫だ」といひてどうべく游いで渡る
事となりました。

池の中程まで渡つた時分、意地の悪い大蛙が、不意に水の
中へ沈みました、鼠は驚いて手を放し、漸くに水の上へ浮きは
浮いたが、自分の足と大蛙の足とが繋ぎ合せてありますから、
大蛙が底の方で葦条を曳くたびに、鼠は頭の先迄水中へ浸
り、口からも鼻からも水がはいり、息をする事も出来ず、頻り
に苦しみもだえて居りますと、大蛙はそれを面白い事と思つて
おます面の、くい蛙め。

折しも池の上を通りかゝつて鳥が鼠を見つけ、よき餌食に有
つたと一目散に舞ひ下りて、一攫みに鼠をさらつて、虚空遙
に飛び去りました、大蛙はどうなりましたらうか、画を御覧な
されば分ります。何と諸君悪い事は出来ますまい。

(挿絵)

ある犬何處にてか一片の牛肉を盗み取りて來り、大悦びにて川の辺迄咬へてゆき、ゆつくり食はんとせし折から、不図水の中に我と同じく、牛肉を咬へたる犬の居るを見たりき。それはおのれの影ながら獸類の悲しさには「ママそれを己の影とは知らず、牛肉を奪はんとして躍りかゝりしに、いかでか取る」とを得べき、最初に消え、剩へ、我口に咬へたりし眞の牛肉迄も、水中へ墜して失ひしとぞ。あまり欲ばれば、誰にても斯のやうなる、馬鹿氣たる失策をするものなり。

第一二二号（明治二一四年二月一九日）

(挿絵)

一匹の狼が食餌にありつかふと思ひ、或家の前へ来りしに、内にて小児の泣く声聞え。乳母と覺しき声にて『さふ泣くと狼に喰はせますよ』といふ。狼それと聞いて『これは、ありがた難い』と窓の下に坐りて待ちてをりしに、やがて小児の泣声も静りたり。其うち再び乳母の声にて『ア、坊ちゃんはよい御子だ、狼が來たら打ツてやりませうね』。狼は案に相違し『打たれてたまるものか』と早々逃げ去りぬ。當にならぬ事を当にすると誰れもこの狼の如き目にあふべし。

(挿絵)

やうと言ひ出しました。蚤は元より跳ぶのが自慢でありますから『オイ虱君、君はまあ現出して走りたまへ僕は血に酔ふて此通り真赤だから一眠入して跡から直に追付て見せやう。ナア二僕がピヨイ／＼と三度ばかり跳ぶと、君等の一日走ソたぐらゐ歩どるから』と、大きな言をひいて其儘鼾をかきて寝て仕まひました。暫くして眼を醒まして見ると虱の影も見えませぬゆゑ『さあ大変、遅くなッた』と自慢のピヨイ／＼を三度も四度もやツて見ましたが、もう追引きませぬ、虱は疾くに身柱村の入口に待ツて居て『蚤さんお早う』。

如何程智慧学問があるとも、自慢をしたり怠けたりすれば何の益にも立ちませぬ。仮令少しばかり智慧が鈍くとも、怠けずに精を出すものの方が遙に優れたる人になります、此道理は只今の話にて能く分りませう。

第一三号（明治二四年一月一九日？）

あるときとりけ虫のハア斐だ。おほかつせん
羽はあるゆゑ鳥方の味方となつて軍をしましたが、敵方に獵し方の負けならんと思ひ、劇に心變りして獸方の味方となりました。

しかし、然る間にもなく敵味方和睦調ひて軍を止むる事となり、や
互に打集りて酒宴を開きましたが、其時鳥方より蝙蝠の
ころがはがけものがたみかたがほくとくの
心變りを獸方へ知らせました故、獸方にも其やうな心に
忠信のないは、味方に在つても害になるばかりと、一同相談の
上遂に蝙蝠を仲間から逐出しました。其故に蝙蝠はどちら方

の者とも顔を見合す事が出来ず、人家の壁のあはいに隠れ栖み、夕方になりて顔のよく見えぬ時に漸く外に出で、食物を探し回るやうな便りない身の上となりましたとさ。人間でも其如く心に忠信のない者は、遂には友達にも見限られ一生わびしく暮すやうな身となります御用心／＼。

尾無し狐。

一匹の狐自分の尾の立派なる事をいつも自慢し居りしが、或時狐穿にかかりて其尾をertzりと鉄み取られたり、狐悲しさ譬ふるに物なく仲間の者より尾なし狐よとて笑ひ譏らるにつけても、最早此世に生甲斐なしと迄にふさぎをりしが、元々善からぬ生れつきの者なれば、如何にもして他の狐等に

も尾を断らせんと狡猾なる目論見をなしぬ。

或日仲間の狐等を招きて次の如く説きすめたり「諸君。

諸君の後の方についてある其尾といふは全體何の役に立ちますか、見にいくづら／＼して用のない、邪魔物ではありませぬ

か、そんな物を附けて置くといふは實に訛の分らぬ話です。諸君はまだ尾を亡くすれば、どれほど便利で心持がよいか御存知ではあるまい。論より証拠、僕は尾を鉄み断つてから、生れぬから、諸君も僕のやふに尾を鉄み断つておしまひなさい。

あらねば「僕達も狐穿にかゝって尾を鉄まれる時があらば、

他の狐等は何れも尾なし狐にだまされる程の馬鹿狐にて、置きます」など、冷かして誰も取あふものは無かりき。他人の言ふ事にうかと乗れば、飛んだ目に逢ふ事あり用心すべし。

『小学生徒之友』

第九号（明治二三年二月五日）

○熊ト旅人（前号ノつづき）

さて熊ハ藪ヤノ中カラ出テ来キテくういくうどノ側ヘ進

ミマシテ頭マカラ足ノさきマテ嗅ギ廻リマシタ此時此人ノ心持ハどんナデアリマシタラウ別テ熊ガ頸クビノまわりヲ嗅ギマシテ生暖ナカナ息イキガ顔カホヘ当アタリマシタラウそれカラ熊ハ幾度イタモ嗅カシタガ死人ト考ガヘマシタカ再フビ藪ヤノ中へはひり見ヘナクナリマシタ

ばかーとハ木カラオリテまゐリマシテ自分ジの卑怯ヒキナ行ナイヲすこし面目ボクナク思ヒマシタノカ常談シダーテごまかス積リテくうじくううと二向ヒ

熊ハなんダ力あなた二耳語サクやうデシタガ何ヲ云ヒマシタト聞キマシタそごテくうううとハ次ツギノやう二答ヘマシタ

熊ハあなたノやう二不人情フニシテ臆病ナ人トハこれカラ交ハラヌガよイト申シタ大概ガイふだん高慢マナコトヲ云フ人ハあぶなイ時ニなりマスト却ツテ臆病オクビナモノデアリマスガ人ハ口ガ達者シナヨリハ行ガたしカナ方ガ宣シウ御座イマス

第一七号（明治二三年六月五日）

○蟻トきり／＼すトノ話 青木幸太郎君寄贈

夏ナツモ過スギ秋アキモたチ冬がれノ頃ニナリテ或暖アタカナル

日蟻アリどもガ多ク集アツリ夏ノ日ニ取り集メ置キマシタ餌エサヲ日ニ
干アキサウトシテ穴アメカラ引出シテ居マシタ所ヘト儀エサヘ勞アラシレ
マシタきりアキすガ這アリヒづりテきニテ命エテヲ続ツカゲたメ少シ其
餌エサヲ分ケテ下サレト乞エサシヒ願エガヒマシタ其時年老アラシタ蟻アリガ
ふりかへリ見マシテ如何様イカあなたハきりアキすデスナそなた
ハ夏中何ヲシテ暮クラシナサレタ又なぜ其やうニ餌エサニハ此夏ハ
スト問エラシヒマストきりアキすハほこり顔カホニ答ヘマスノニハ此夏ハ
面白ク花ト戯アソブレタリ葉ハニ眠ネムリタリ露スルヲ吸スヒテ歌ウツブ
「モアレバ舞アソブフ「モアリマシタト言ヒに切キラヌニ蟻アリハ笑ワラヒマ
シテさう云ウ「ナレバ恵メグム」ハ出来デキマゼン我共ドモハ夏ノ
炎天エニモ背アキヲ暴ササシテ餌エサヲ運アシビ冬ノ用意ヨウイヲシテ置キ
マシタ故ニ今日ノ安心アシカアルノデスそれ二あなたハ長ナガイ夏
中歌ツタリ舞フタリシテむだ三月日ヲ送リナサレタカラ冬ニナ
ルトそのやうニ饑エテ動ウゴグ「モ出来ナイやうニナルノデスト
云ヒマシタ皆さん鑑カミミベキコトデハ御座イマゼンカ

○ころバスさきノまへづゑ 野島市三郎君寄贈
野猪シカガ松ノ幹ミキヘ牙キバヲすりつけテ磨アシテ居夕時狐キツガ
キマシテ声コヨカケはて御前ハ何ヲしナサル獵師ウシモ来ズ大モ
吠ホエズなんニモ心配シハ無イデハナイカト申シマスト猪シバハ振
返アラシカヘリさうサだが騒動ソウガ始マツテカラハ私ハ牙ヲ磨グヨリ他
ホカニ用ガ沢山アリマスト答ヘマシタ

諸君ハこの話ニ就ツキテ何方ドモヘ贊成セイテスカ無論ムロ猪シカノはうデ
アリマシヤウ今兵隊ハイガ劍ツルヲ抜ヌケト云フ喇叭ラッガガなツテカラ
ラ劍アシ磨ギ始メテハまニ合アリハナイト同ジ事デ凡テノ事ガ前ニ
用意ヤウシテをケバ後ニ仕損シムコハ少ナイモノデアリマス生徒諸

君も日々御通学ソウなサルノ明日受ウクル学科ガクヲ其前日さ
らいヲ致シテ置ケバ其学科時間ニナリマシテ至極シヨ愉快ヨク二課
業カギガできマス毎日アリこのやうニシテ倦ウマズ怠ラズ勉強スレ
バコソ試験シケンノたびアリに善イ成蹟セイセキヲ取ラレルノデアリマス
決ケツシテまへざらアリ急アツテハナリマゼン

第二四号（明治二三年九月二一〇日）

●あんどうーくるすト獅子トノ奇話

土屋大次郎君寄贈

か一せーじト云フ所ニあんどうーくるすト云フモノガアリマシ
タガ主人ノ取扱トリハヒガ余リ酷ムゴイノデ逃出アリサウト決心タダシ
シテ或夜ノ「隙スキヲ窺ウカヒ主人ノ家ヲ抜アリケ出アリテ半里許バカ
ナル深フカイ森アメノ中ニ隠カクレマシタガ彼処アチ此処アチト歩ルキ廻
リマシタノデ腹ハラハ飢ウルシ体カラハ痛シカレマツマツマシタカラ一ツノ
洞穴アメラ見付アリテ其中ニ入り伏シ倒タホレテ眠スルリマシタするト

何ヤラ洞アメラノロデ恐ロシキ獸ウツチノ吼声ゴヘガ聞ヘマシタノ二目ヲ
覚サマシニわくアメラナガラ能ク見レバ一匹ノ大獅子ガきらアメラシ
タル盆ボンノ如キ眼アメラ光ラシテ立テ居タノデあんどうーくるす
ハ大ニ驚キ逃レントスルモ術テクナク如何ハセントふるベテ居リマ
シタ然シ獅子ハニ二害アメラガ加ヘル様子ハナク却カヘツテあはれニ
苦痛クルナル声アメラ出シテ助アシケテ求メル様デあんどうアメラくるす
ニ近ヅキ來リマシタそラシテ獅子ハびつアメラ引ク様デスカラ
足アメラ見マスト前足アメラガ腫アメラレ上リテ実ニ痛アメラサウデスノデあんどうアメラくるすは不憫アメラニ思ヒ怖オソロシサヲ忘アメラレテ獅子ノ足アメラろしアメラくるすは不憫アメラニ思ヒ怖オソロシサヲ忘アメラレテ獅子ノ足アメラ

バ 大ナルとげガ刺サ ツテ居マンタカラ 軟ヤバ カニ其とげヲ抜キ取

リテ善ク療治サシテ遣マシタすると獅子ハ痛ガ減ジ

タ様子デ大ニ悦ンテ能ク馴ナタ犬ノ如クニ尾ヲ搖リあん

一くるすノ手足ヲ舐メタリナド致シマシタ

夫レカラあんどろ一くるすハ獅子ノ客同前セントナリテ何時

デモ獅子ハ美味ナル果物又ハ肉類ルイナドヲ持ツテ来テ養ナ

ツテ吳レマスカラニ三月間ハ此洞穴ニ隠クレテ居リマシタガ

或日余リ退屈タノテ運動テモシテ見ヤウト思ヒ洞ノ外ヲ

散歩シテ居タノヲ計ラズ自分ヲ探サズ兵卒ニ見付ケラ

レ遂ニ王人ノ所ヘ連レテ行カレマシタ

あんどろ一くるすハ裁判所ナニテ調ア受ケ逃亡罪ニテ

衆人ノ前ニテ猛獸ノ為メニ啞ミ殺サレベキ「ヲ言渡サ

レマシタ驥テ其日ト成リケレバあんどろ一くるすハ刑場

引出サレ今ヤ猛獸ノ為メニ餓ヒ殺サレル「カトサメドヘト

泣キ居タリ既ニシテ雷ノ如キ吼声ヲ発シテ一匹ノ大獅子

出テ来マンタガあんどろ一くるすヲ見ルヤ飛ビ付カントハ致シ

マセハテ尾ヲ搖リ頭ヲ垂レテ恰カモあんどろ一くるすヲ見

知テ居ル様デシタソシテ役人共ハ不思議ニ思ヒあんどろ

一くるすニ詫ワ尋ねマストあんどろ一くるすハ此獅子ハ一度

自分ガとげヲ抜イテ遣ツタ獅子デアリシ「カラ詳シカニ語リ

テ其恩ヲ忘レナイデ此ノ様デアリマシヤウト云ヒマシタ役人

共ハ此話ヲ聞キ憐アシニ慰ヒ終ニ嘆願マシテあんどろ一くるすノ命ヲ救ケテヤリマシタト申シマス

READING LESSON.

The wolf and the goat.

A hungry wolf saw a goat feeding on the top of a high cliff, where he could not reach her, so he begged her to come down, lest she should miss her footing at that dizzy height.

"And besides," said the wolf, "the grass is much sweeter here than it is up there, so you would be able to get a far better dinner."

"Thank you," said the goat, "I will come down when you are gone. I am afraid that you are thinking more about your own dinner than mine."

讀物

狼ト山羊

飢エタル狼アリ高キ岩ノ頂上ニテ草食セル山羊ヲ見タリ而

シテ狼ハ之ニ達スル能ハザリケレバ山羊ニ向ヒ斯ル眩(?)ツヅキ

高地ニテハ足ヲ踏ミ外(?)スノ恐レサヘレバ下リ来ルハトシ

又曰ク其レノ"ナラズ此處ノ草ハ岩ノ上ノ草ヨリ美味ナレバ

君ハ更ニ善キ食事ヲ為スラ得ベハム

山羊曰ク難有シ去レド余ハ君ノ去リタル後チドルベシ余ハ

君ガ余ノ食事ヨリ君ノ食事ヲ得ント思ヘル「ヲ恐ルナリ

*原文では、和文は横書きで、英文と対照できるように英文の右に配置されている。英文には片仮名のルビや発音が示されている。

第一図（鳥が串団子をくわえぬ）

第一図（串団子をくわえた鳥が松の枝にとまり、それを

根元から狐が見ぬ）

第三図（狐が串団子をくわえぬ）

第四図（鳥がよだれをたらしてこぬ）

以上の四図に以下の解説が載る。

●ほんち画解

1鳥「今日ハ^モモ^モ」^{モモ}ハガケナク団子^{モモ}ヲ一串^{モモ}拾^{モモ}ツタカラ早

ク彼^モノ木^モヘ行^モツテ喰^モウ^モズイ

2サア来タソ、早ク食^モウ^モズイヤアトヤ^モ狐^キガ喰^モヒタソウ^モ見

テイヤガラ、馬鹿^{バカ}、狐サン喰^モヒタイカアシ余リ^モレヤベシ^モト団子

ヲ落シタ大変^{ハハタ}

3狐ハ落チタ団子ヲ拾ヒテ走リ行ク

4鳥ハ^モモ^モ」^{モモ}だら^モ～

「英語独解」

READING LESSON.

THE DOG IN THE MANGER

A dog once went into a stable, and made a bed for himself on the hay, which he found in the manger.

Now this hay had been placed there by the farmer for his two horses, which were hard at work in the fields, while the lazy dog was sleeping.

In the evening the horses returned very tired and hungry. But when they tried to eat the hay, the surly dog barked and snapped at them.

(to be continued)
讀物

馬槽中ノ犬

犬ガ一度厩^{カマ}ニ^マテ行キシ而シテ枯草其レハ彼レガ馬槽^{カヒバオケ}ニ於

テ見出セシ所ノ枯草^{モドロ}ニ於テ彼自身一向シテ寝床^{ベッド}ヲ造リシ

今此枯草ハ怠惰ナル犬ガ眠リシ^ハ有リシ間ニ^ハ島ニ於テ働くニ於テ堅クアリシ所ノ彼ノ^ニシノ馬ニ向シテ農夫ニ^モシテ其處ニ置力

レテ有ツタ

晚ニ於テ馬ガ甚ダ勞レ而シテ饑エテ帰リシ^ハ併シナガラ若シモ彼等ガ枯草ヲ食フ^ハク試^{ハシ}シ^ハ時ニ意地悪シキ犬ハ彼等ニ於テボエシ而シテ咬^{ハシ}ハ

(ハシハシ)^(ハシハシ)

*原文では、和文は横書き^モ、英文と対照でわぬよ^モに英文の右に配置^モれて^モ。英文には片仮名のル^モで発音^モが示^モれて^モ。

第四六号（明治二〇年五月五日）

READING LESSON.

THE DOG IN THE MANGER.

(Continued)

At last the farmer came to see what was the matter, and with a whip drove away the dog, saying you might let those eat it who can.

THE VIPER AND THE FILE.

A viper once found its way into a black-smith's shop, and began looking amongst the tools for some-thing good to eat.

(to be continued)

読物

蝮蛇ト而シテ鑓

読物

馬槽中ノ犬

((ハシヤ))

終ニ農夫ガ事柄ハ何テアリシカア見ルベク來リン而シテ鞭ヲ以テ犬ヲ彼方に逐ヒシ汝ハ此等ヲシテ能フ所ノ者ニ其レヲ食ハシメテスレバシ

蝮蛇ト而シテ鑓

蝮蛇ガ一度鍛治屋ノ店ニマテ其道ヲ見出セシ而シテ食フベク善キ或物ニ向テ道具ノ中ニ眺メシハシバシ

((ハシヤ))

*原文では、和文は横書きで、英文と対照できるように英文の右に配置されている。英文には片仮名のルビで発音が示されています。

『少年園』

第四六号（明治二二三年九月一八日）（ルビはすべて左傍にある）

以蘇善の事を記す。

(Continued)

第四七号（明治二二四年九月一〇日）

READING LESSON.
THE VIPER AND THE FILE.

At last it came to a file which had been left lying on the ground. The viper, never having seen a file before, seemed to think that it must be very nice to eat. So it curled itself round it, and began to bite it.

But the file only laughed, and said, "You must be very foolish to think you can hurt me. Don't you know that I am so hard that I am used to bite iron and steel?"

今を距ハリシナ七年、余は学暇を以て以蘇善が寓言を訳し、又其伝記なども綴りたるにありにキ、其外レツシングが寓話、マルチ、ルーテルが諭言等は、あらかたは訳して、作文の練習とはなし。今は已れが本業あれば、是等の文章は手にも就かず、之にも附かず居りしに、曝書せしむる折、其れの文書、偶も田に触れそばに、当年の生活を憶ひ起やしむる所となり、傍へ當時の友人などを追憶すれば、或は黄泉に赴きし者もあり、（飯田流芳とて偶に一書窓に学問せし友人）或は遠

終ニ其レハ地ニ於テ横ハリツツ残サレテアリシ所ノ鑓ニマテ來リシ 蝮蛇ハ決シテ前ニ鑓ヲ見ナシダ所テ其ガ食フベク甚ダ美シクアラネバナラヌト考フルベク見エシ 左様ニ其レハ其レヲ廻リテ其レヲ捲キシ而シテ其レヲ噉ムベク始メシ併シナガラ鑓ハ唯ダ笑ヒシ而シテ云ヒシ汝ハ汝ガ私ヲ噉ミ能フト考フルベク甚ダ馬鹿アラネバナラヌ汝ハ私ガ鉄而シテ鋼鉄ヲ噉ムベク用ヰハレテアル「ホド左様ニ堅クアル」ヲ知リナサヌカ

*原文では、和文は横書きで、英文と対照できるように英文の右に配置されている。英文には片仮名のルビで発音が示されている。

く亞米に航し、実業を修めて未だ帰らざる者もあり、（西村金
一、倫香子と号し、俱に文を講じ詩を賦し、互に兄弟視したる
朋友、）而して此断篇零冊は歳月を閲すること僅かに六七星
霜に過ぎざるも、各人の境遇、各人の思想は自ら変遷を閲し
たることを憶ひ出す伝手とはなりぬ。爰に当年ものせる以蘇
菩の小伝を抄録して、聊か感を書し、以て貴園に寄す、

となり、之に事ふこと恭謹なりしが、特爾斐人の之を憐むありて、^{テルフィ}其身を贖はる。

明治二十三年七月。
魯の孔子生るの四五百年前、雅典の統領達拉公老いて
梭倫相交り、方々に立法を布かんとするの時、(紀元前五百八
年)
関場不二彦述。

嘗て之を莊子に知る、哀駘它是其才を以て魯公に信ぜられ
鬪政、支離、無唇の徒は衛の靈公に説き、覽盜は齊の桓公に説
いて、用るられたるを。其れ素より漆園が寓言に過ぎずと雖
も、然れども徳の長ずるあれば形の醜の忘らるゝは誠に然り。
今や以蘇菩が身は奴隸の苦より救はれたり、乃ち其才、其徳、
以て權貴の家に説き、以て王侯の心に悦ばれずんば、方さに其
身を如何せんとするや。

ア
十年より六百年の比ト小亞細亞、弗黎家の地ト或はいふ呂底
亞ト同じく小亞細亞にありき。……或はいふ德拉基ト……
今サモスの歐羅巴土耳古ト……或はいふ沙摩西島トに異人トを生じ
ぬ。其人トなりや、軀幹矮小トにして、容貌太トだ醜トくかりき。
世トに處して貧に齧れたりと雖も、苦に居て志を破らず、天資は
英敏夙トに学識を備トへ、年壯にして身嘗に坎ト壠ト、時に売られ
て奴隸トとなり、或は用トるられて大夫トとなり、間関崎嶇の際、無
くトうんひゆ

限の経験は此人をして寓言譬喻の妙エントボスを以て名を万秋に留めしめたり。それ之を誰とかする。以蘇翁Aesōpos,(Aesop.)是なり。

然れども以蘇菩が行事は譬如として暗きこと多く、詳に尽せる史籍なく、今や考ふべからざるなり、其生地は已に数处あれども弗黎家州の地真に近し、其他は概ね以蘇菩が長く滞留せし所たるに過ぎ(ママ)ざるならむ。以蘇菩は年壯なるに及ぶところ、凶らざる運命に遭遇し、売られて人の奴となり、日に労役に従ひ、主の鞭笞を受け一二歳月の間転売せられて主を代ゆること数回、最後沙摩西島の一富豪なるヤドモンが奴隸

是に於て以蘇苦は其身を扮して、富豪の門を叩き、諸邦に遊説して或は王侯に説き、諷諫する所少なしとせず。時に街頭に出で、衆を集めて、其説を演ぶ、概ね是れ仁義の言にして、彼波那（バルナス）はルナス山頭の乱神怪力には非ざるなり、唯往々諱に騒るの癖ありて、怨恨を受くることあり。嘗て滑稽嘲罵いただ、意偶アーリ特爾斐人に中る、特爾斐人之を聴き、窃かに怨望を懷き、將に報リコディアするあらんとす。

この時呂底亞邦に一賢王あり、名を格羅索カルロソ（カルロス）はカルロス紀元前五百六十二年はがと云ふ。励精治を圖り、疆土を拡ひらむに急なり、頻りに人材を登用す。以蘇苦の賢を聴くや、幣を厚くして、之を招き、遂に任用し、官職を授く。

以蘇菩はのち王命を奉じて特爾斐に赴く、其意諸邦の状態を視察するに在り、或はいふ神語ラーケルを聽て兵略の方向を定めんとすと、蓋し當時王が拓地の志専らなりしを知るなり。時に特爾斐の僧侶等謂へらく、以蘇菩の来る必ず我が為に不利なるべし、来らば之を除くに如かずと、而して以蘇菩は之を知らず遂に深谷に擠おどすされて死す。一史家はいふ其終あり

る所を知らずと。

史籍邈たり考ふべからずと雖も、以蘇菩の名を以て仮どなし、以て記録より脱却せんと欲するは、誣ゆるの甚だしき者なり、齊諧其人は或は之れながらむ、然れども亦彼の希臘古代

伝來の談話を、詩史に合綴大成して、和馬羅の名を附したると同一視して、希臘古代よりの千万寓言中秀逸の者を挙びて殊更に以蘇菩の名を作り、以て其寓言を大成したる者なりといふは尤も是れ穿鑿家の言にして不正当の者なるなり。

以蘇菩は當時の人を教ゆる懇懃（ひんぎん）なりき、例を近きに取り、簡に諷意を孕み、絮々たる慢言なく、短刀直ちに墨を摩して、其要を説き、説き終れば断乎として其終結を取り、而して以蘇菩は其譬喻を概ね実事（その時々の出来こと）に徴して作りたり（第一章を参考すべし）。故に當時人情風俗の一反射鏡画（レフレックスビルト）たるなり。嘗後人は此等の同様なる事実を他様に賦写し、或は更に皆無の虚構を事とし、漫に言行を禽獸に仮したるに止まり、この賦詠したる仮想のみよりして一般の真理を説かんとせしなり。而して以蘇菩は己に実事に徴して寓言を賦したれば、実事寓言俱に同様の真理を發揮するを勉め、復た之を發揮したるなり。（レッシング）

以蘇菩が自ら筆を搦りて其寓言の書を編したるやは未だ詳かにせざる所なれども、今ま假りに以蘇菩自ら之を編せりと定めて、之を考ふるに、其自記せる文字は今日に於て一も吾人の手に伝はざるなり。而してまた希臘文学の諸集中に散見する絶妙の寓言に以蘇菩の名を冠し、あるは吾人の須らく記憶に存すべき所なりとす。

某為レ人何僕。一日歩ニ於公苑一。遇ニ少年一群于一レ途。皆大笑曰。彼非ニ以蘇菩之再生一乎。某曰。我固以蘇菩耳。即能使下ニ鳥獸一人語上。意氣揚々而去。

盤峰樵者稿。

*原文では左傍にあるルビ。

『花の園生』

第三四号（明治二六年一月）

伊蘇菩物語

晚翠禪史訳*

天氣麗らかなる日野牛がいと心地よく艸原に遊び戯れて樂みける時、土鼠出で来りて烈しく噛み附き傷を負はせければ、野牛以ての外に立腹して土鼠の穴を抓き撥き、只一潰に踏み殺さんと敦囲たる暇に、土鼠再び出で来りて竊と野牛の脛脇に跛ひ上りて、又もや痛く噛き附きたり。野牛烈火の如く焦ら立ちて振り返らんとすれば、土鼠は早くも穴の中に逃れ去りぬ。野牛益々哮り狂ひて只管に地を攬き乱しつゝある時、土鼠は穴の中に「体躯は大きくとも威張り散らすものにあらず、小さきものにも油断は出来ぬものぞかし」と嘲りぬ。雄鶏を捕へ去りぬ。

さて我家に帰りて此鶏を料理せんとする時、鶏哀れなる声をして憐を乞ふて曰く「お慈悲には生命ばかりは助けてたべ

たうぞくをどりはなし

盜賊と雄鶏の話

たうぞくをどりはなし

たうぞくをどりはなし

盗賊一夜農家に忍び入りて此處彼処尋ね廻りしかど盜むべき家財絶て見当らざりければ、責めてもの腹癒せにと一羽の雄鶏を捕へ去りぬ。

候へ我は朝な朝な疾く起き出でゝ家の人々を覺し夫々の仕事に就かせ候ほどに農家には無くて叶はぬものにて候ふものを

ぞ、其は爾朝疾く起きて啼き叫びなば我が夜業の妨害にこそなれ」と、盜賊答へて曰く「然ればこそ猶更に助けて得させまじき

悪意ある者に道理を聞かすれば却て悪意を增長せしむるの媒となるものなり。

* 目次では訳者は「桜外生」とある。

第三五号（明治二十六年一二月）

桜外生 訳述

鷹と鷺の話
伊蘇博物語

春の日麗らかなる時、鷺梅が枝に来りて得意にホー法華經を囁りけるに何処よりか厳めしき鷹來りて矢庭に鷺を攫み去らんとす。驚き懼れて「願くは我が命助け給はれかし此小やかなる我が身卿の餌食の足にもなり候まじ他には我より大きやかなる鳥も多からむものを」と哀しみ訴へければ鷹は冷笑ひて「拙者の眼中に入らざる鳥を目的にして掌中の餌食を見るのがす無慮があるか」

鳩と鳥の話
籠の内に閉ぢこめられたる一羽の鳩あり或日その籠に向ひ己れの自慢話を為しつゝある時籠の上に一羽の鳥ありて之を聞き居たりしが頃て「籠の中に閉ぢこめらるる身分で今の自慢が云はれた義理であるまいチト自由に空飛ぶ鳥を見てもの云ひなさい」と嘲けりしとぞ

『少文林』

第二卷第五号（明治二七年二月三日）

久津見蕨村

◎蛙の演説

或る所に頗る大なる池がござつた、然るに或日この所へ大相談をして居た、所が此の池の中には多くの蛙が棲んで居つて、水面に浮んだり沈んだりして樂氣に遊んで居る、子供は之を見付けて、ヤア蛙が沢山に居る、彼等に石を投付けて見やうではないか、能く当つたものが傑出のだぜ早くやり玉へと云ひ、大勢の子供が我も我もと、蛙を目掛けて石を投げ掛けたから、蛙の方では溜らない、鼻柱をグシャヤとやられるもあれば、例の飛び出した眼をコツンと云はされるもある、其の危険誠に云ふ可らざる次第と相成つた、子供は之を嬉しがつて居れど、蛙は一家一族の滅亡の時にありと悲んで居る、いやハヤ憫然な有様と相成つた、所が年を経た蛙の親方が、水面にピヨコと立ち現はれ、子供衆諸君少し待つて下さい、諸君が今為さる所は、何程私共に残酷であるかと云ふ事を御考へが願ひたい、諸君は御樂みでござらうが、私共は誠に死ぬ苦みで居ります、何にも私共は諸君の害をするではなし、斯様な目に会はされるは、誠に迷惑千万ござる、若し人間よりも大きな悪戯者があつて、人間を斯様な目に会はせたらば、諸君はどうなさる、イヤサ人間はどうなさる、少し御推察が願ひたいと云つた、流石の悪戯な子供も、此の理屈に詰つて、ヒヤ／＼御尤も／＼と云つたなり、散々になつて仕舞ふた、何んと読者、諸君、蛙の演説は至極尤もではござらぬか、虎

や狼や獅子のやうな猛獸は、人間の害物だから、己むを得ず殺さねばならんが、蛙や蝸牛や蛇のやうな無害の小動物を無暗に殺したり、害めたりするのは、可憐さうではないから

ぬか、牛や馬のやうな人間の役に立つ動物でも、酷く取扱ひ、余計に鞭たり、空腹で居るゝ走らせたり、或は其の力に余る物を荷はせたり、或は老年になつて河舟へして居るゝ流く使つたりすのは、善くない事だ、又食用に供するため、又は有害だからと云つて、殺すにしても、余計な苦みをやせらる

のでない、何故かなれば、動物でも人間でも、天から受けた生命には別段の変りはない、矢張生を欲して、死を嫌ひ、苦を厭ふて、樂を欲しまさうに依つて、夫れを無暗矢鱈に害めたつて、殺したりすれば、天に背く事であるからだ、若し無害の小動物を殺したり、害めたりする事を、宜いはしない放て置くゝや

は、其れが習慣になつて、遂には人間仲間までを殺したり、害めたりする事を起ことにゆむのだ、それだから諸君、動物に対してゆ決して無慈悲な事をしては、相成つませぬ。

(挿絵)

や狼や獅子のやうな猛獸は、人間の害物だから、己むを得ず殺さねばならんが、蛙や蝸牛や蛇のやうな無害の小動物を無暗に殺したり、害めたりするのは、可憐さうではないからぬか、牛や馬のやうな人間の役に立つ動物でも、酷く取扱ひ、余計に鞭たり、空腹で居るゝ走らせたり、或は其の力に余る物を荷はせたり、或は老年になつて河舟へして居るゝ流く使つたりすのは、善くない事だ、又食用に供するため、又は有害だからと云つて、殺すにしても、余計な苦みをやせらるるのでない、何故かなれば、動物でも人間でも、天から受けた生命には別段の変りはない、矢張生を欲して、死を嫌ひ、苦を厭ふて、樂を欲しまさうに依つて、夫れを無暗矢鱈に害めたつて、殺したりすれば、天に背く事であるからだ、若し無害の小動物を殺したり、害めたりする事を、宜いはしない放て置くゝやは、其れが習慣になつて、遂には人間仲間までを殺したり、害めたりする事を起ことにゆむのだ、それだから諸君、動物に対してゆ決して無慈悲な事をしては、相成つませぬ。

『少年新編』

第一弾 (明治三〇年七月)

◎ヤンシップ物語意解及註釈*

AESOP'S FABLES.

THE WOLF AND THE LAMB.

One day a Wolf and a Lamb happened to come at the same time to drink from a brook that ran down the side of the mountain.

The Wolf wanted very much to eat the Lamb, but meeting him, as he did face, to face* he thought he must find same excuse for doing so.

So he began by trying to pick a quarrel*, and said angrily, "How dare you come to my brook and muddy the water so that I cannot drink it? What do you mean?" "The Land*, and the wate* runs from you to me, not from me to you."

"Be that as it may," said the Wolf, "you are arascaleeath* same, forlhav* heard that last year you aid* bad things of me behind my back."

"Oh, dear Mr. Wolf," cried the poor Lamb, "that* could not be, for a year ago I was not born."

Finding it of no use to argue any more, the Wolf began to snarl and show his teeth. Coming closer to the Lamb, he said, "You little wretch,* if it wasnot* you, it was your father; so it's all the same," and he pounced upon the poor Lamb, and ate her up,*

When people mean to do bad anl* cruelthings* they can easily make excuses for it.

*皿次りば「伊蘇普物語……匂人」ルモア「匂人」は

「S.F.」ぐる人物。

Stickney 原本の校讎をしたるトロウ。

Lamb -- Lamb wate -- water

arascalaethe -- a rascal all the forlhave -- for I have

aid -- said htat -- that tothe -- to the

wasnot -- was not wretch. -- wretch, up, -- up.

anl -- all cruedthings -- cruel things,

意

解
おほかみ
狼と小羊

あるひ、おほかみ、こひつじとが、山の傍を流れる小河にて、水を飲
まんと、偶然同時に来り、遇へり。狼は非常に此小羊を食はん
と欲したりしも、去り、今斯様に面のあたり出遇ふて居る
なれば食はんとするには、何か托辞を見出でしやうを得ず、考へ
たり。それで先づ喧嘩をしかけて見んと為し、怒りて睨く。

「なせ、おまくはおれの小河へ来て、おれの飲めなほど、いん
なに水を濁らしたか。全体御前はどうう存じ寄りで斯く
なつたのか」

と、小羊は痛く駭き、怖れ、静かに

「私が此水を悪ひへつたなほひへつて、左様なじゆうであのの
か、私には駄ひむよいぬ事で。あなたはわつと高ひ水上に
おひでなされて居て、水はあなたの方から、私の方へ流れる
のや、私の方からあなたの方へ流れるのやば、なごのや。」

と答へたり。狼は

「やー其事はあにに致せ、其れに干ばつや矢張お前は
奸者だ、なまくねるは、お前は、昨年薩でおれの事を要ひ
ふるたる、おれを聞こたるがお。」

おひでなされ
る小羊は叫び出せ。

「左様なじゆうのあら筈は御座、おおかな。」

私は生れませぬやした。

進んで彼此論あはれは、益なあいと駄ひ、狼は、喰りて歯をむ
き出し小羊の傍へ近寄りて、口く。

「ウス小癪な悪人ぬ、若しウスガをうむふただなごな、ウ
スの親父がそつにふたのだ、いわゆる、其れはむなじいふで
ある。」

と遂に狼は、小羊を攫まで食ひだへ(マツ)せり。
人若シ不良残酷ナル事ヲ為サノト欲セバ、容易、
マレガロ実ヲ作り得ベシ。

註 駄

(省略)

第二二号 (明治二〇年九月)

◎ヘンシップ物語詰駄及意詰*

THE DOG AND HIS SHADOW.

A dog once had a nice piece of meat for his dinner.
Some say that it was stolen, but others, that it had been given
him by a butcher, which we will hope was the case.

Dogs like best to eat at home, and he went trotting along
with the meat in his mouth, as happy as a king.

On his way there was a stream to cross, and as the water
was still and clear, he stopped to take a look at it.

What should he see, as he gazed into its bright depths, but
a dog as big as himself, looking up at him, and lo! the dog
had meat in his mouth.

"I'll try to get that," said he, "then what a feast I shall

"As quick as thought* he snapped at the meat, but in doing so he had to open his mouth, and his own piece fell to the bottom of the stream.

Then he saw that the other dog had lost his piece, too.

He went sadly home. That day he had only his thoughts to

dine upon. What do you think they were?

* 目次には「イソツア物語（意訳及註釈）」とある。

thought -- thought

註
釈

省略

意訛

犬あり、嘗て脣食に甘き肉の一片を得たり。或人は曰ふ。こは盜みたる物なりと。されど又他の人々は、此肉は屠者のそが与へたるものなりと云ふ。余輩は後の方が事実なることを望むものなり。

凡そ犬は、家に居て食事するをいとも好むものなるに、今彼れは王者の如くに幸^{さき}はひて、其肉を口にくはへ、前方にと駆け進

みち
途にあたり、渡るべき一條の小河ありき、水静かにして澄わた

りたりしかば、水面を一眺めせばやと立ち止まれり。今や彼れ
ひとなが

其透明なる深みを睇視したる時、見るべかりしものはそもそも何物にてありしが、彼れはおのれを見上げつゝある、已(マミ)れと等々

は居たりけり。

The next time the Fox met the Lion, he was not so much afraid, but he said to himself, "I wish he would not make such a noise!"

The third time they met, Fox was not frightened at all. He ran up to the Lion, and said, "What are you roaring about?" And the Lion was so taken by surprise, that he walked away without saying a word.

第四号（明治三〇年一月）

◎イソップ物語注釈及意訳 THE FOX AND THE LION

A little fox was out playing one day, when a Lion came roaring along. "Dear me," said the Fox, as he hid behind a tree, "I never saw a Lion before. What a terrible creature! His voice makes me tremble."

The next time the Fox met the Lion, he was not so much afraid, but he said to himself, "I wish he would not make such a noise!"

「其肉を取つてくれよう、そつするとどんな御馳走になれるだ
ろう」と彼者は云ひぬ。彼者はしか思ふや否や、すばやく其肉
に咬み付かんとなしたりしが、さて斯くなすには、己ママれの口
を開かざるを得ざるを以て、遂に己ママれのくはへ居たりし肉
を、河底へ落したり。

而して、彼者は他の犬も又其肉を失ひたるを見て、すぐと
家に還りけり。

其日彼者は只、食はんとの考を抱きたるのみに止まりて、其考
の如く喰ふことを得ざりき、諸君は其考に付きて(善かりしか、
悪しかりしか)如何に思はるゝか。

(挿絵)

(省略)

注釈

意訳

あるひに小狐、外に出で、遊び居たりしに、前方へ一匹の獅、咆哮しつゝ歩み来れり。狐は木蔭へかくれて云へり、「オヤマー是迄一度も獅を見た」とがなかつたが、なんと恐ろしい動物ではないか、あの声を聞くとからだがぞつと慄へる」と其後此狐かの獅と出遇ひたりしが、其時は、以前ほどに畏懼せざりしか併し「あんな声をせなければよいのに」と独言を云へり。其後第三回目に出遇ひたりし時には、最早毫も驚かざりき、獅の処へ走り出で、云く、「あなたは、何をほえて居ますか」と、獅は意外のことに驚かされ、一語も言はずして行き去りぬ。

訳者曰く、'What this little story teaches us?' 此短き物語は如何なるの?を吾人に教ゆゆか。

○貪欲太郎嫉妬之助の話

今はむかし、貪欲太郎嫉妬之助といふ二人ありけり、頃しも夏のことなりしが、をのれらと同じやうに、世をわたるねだけもの、あるは馬鹿もの、住居を尋ね求めむとて、二人してさよまい出にけり。道すがら、おのが容貌の恐ろしく醜きこと競ひ争ひて、一人りがなにに、愛情とてはつゆなかりけり。物凄く顔色蒼白き貪欲太郎は、背と肩とを折曲げて、物入れたる箱をいだきしめ、誰れかこれへ目を注ぐものやあらむかと、たえず其鍵を凝親居りぬ。嫉妬之助は、妬ましげに田くなした

る眼を、一秒間も其箱より放たず、心のうちにには、此箱は必ず先き輝く金銀もて充てるならむと考ふ。貪欲太郎は、わが貯へはいくらありてもまだ一足らぬとのみ囁きつづけ、嫉妬之助は、きらりと/orする眼を張り詰めて、羨ましげに黄色なる歯を食ひしきりつ、かれはおのれよりいつも／＼物多く持つ、とのみ呻吟きぬ。かくおのがまにまに宝櫃の事をのみ心に想ひ歩みけるほどに、不意に希望の神が、目の前に立ち居るを見つけ、二人りはいとも驚きぬ。希望の神二人連にいふやう、名譽にて、宝にても、はた何なりとも、ほしき物を願ひ望みたまへ、そを賜はらん、たゞ後方に望む人には、先きの人の願ひたるものと、二倍にして、与へんといふ。世界の宝ほしがるはた、妬み羨ましかるをのこだち、かくの如き折に出遇いなば、いかにしてかよからん、想ひみるべし。太郎も助も低くさやきぬ、世にありとある、善きもの、宝をえてしかな、されど、のちにかかる人は、そか一倍をえるものをとて、たはやかく言ひもせで、まどひあへり。嫉妬の助は、己れ先きに言ひいで、のちに太郎が已(わ)の二倍を得ば、妬ましき限りなりと思ひぬ。貪欲太郎は、嫉妬に先づ望ませてのちにおのが二倍を得んとはたくらみぬ。されば互に顔見まもりて、いつ言ひ、いつくもあらず、希望の神たえかね、さるにても斯くして、一日を空しくらすときはよしなきことなり、街道にて顔かたち羨しくらうたき人々とかたりあふ、よその見るめもいからず、あらむと、いたくはらだちけり。竟に嫉妬の助、さきに言ひ出で待ちまうけたる貪欲太郎をば、底意わろき笑もて、嘲りつゝ、わがねがひと申し侍るは、他にあらず、我が一方の眼を盲になしたまはれとそ言ひたりける、嫉妬の一念まことにさもあるべき事なり。

(挿絵)

『羽陽之少年』

第六号 (明治三五年一一月一五日)

かうもりの二

霞

山

子

ある時小鳥と鼠とが、互に仲間をあつめて、合戦をはじめました。この合戦を見てゐたかうもりは、どちらへ身方をしようかと、しばらく様子をめ眺てゐました。そのうちに、小鳥の方にがつよくに見えたから、かうもりは、「我れは羽があつて小鳥に似たから」とて、小鳥の身方になりました。

やゝあつて、鼠の方にかちいろが見えて来ました。するとかうもりは、またいふよー、「我れはーたい鼠に似たから」とて、つのまにか、うらぎりして鼠の身方になりました。れかよーにして、はげしく戦ひましたが、両方互につかれましたから、つひになかなほりしてわかました。

これから小鳥も鼠も、かうもりの一心の行をにくんで、仲間に入れません、もし見つけることがあろうならすぐじめでやりますから、かうもりは始終あかるい所へもでられないで、ほら穴になどすみ、小鳥等の居ない折にばかりちよーくでて餌をさがすよーにして居るのださうです。

*1 「め眺」は「眺め」の誤り。
*2 「れ」の位置の誤り。どちらも行頭に当たる箇所で、
一行ずれる。

『少女智識画報』

第一号 (明治三八年九月一日)

(挿絵)

狐と鶴のお伽話 (イソップ)

鶴が、田におりて、餌食を求めてゐるのを、狐が見つけて、一つ、たばかツてくれよーと思ひ、『鶴さんー、私の家に往きましたのんか、お前さんに御馳走するものがあるから』といひましたの

で、鶴が喜んで、一緒に狐の家に往きました。狐は、平たい金皿に、粥を少しばかり出して、『お前さんは、堅い物は食べられないから、やわらかな物を作りました。さてお上り』といひますので、鶴は、たゞよーとしても、長くて細く堅い嘴ですから、どーしても食べられません。狐は『お腹もすいてる時刻だに、何とて食べませんか。お前さんが食べぬなら、たゞ捨てるも勿体ないから、私が頂いて仕舞ひましよー』と言ふて、するーと食べて仕舞ひました。鶴は、くやしがりて、色々に考へ、其の次に逢つた時、『お前さんに上げよーと思つて、取つてた物がありますから』、とて、自分の家に連れ来り、徳利の様に口の細い入れ物に、よい香のする食べものを入れて、出しました。

鶴の嘴なら此の入れ物から食られますけれど、狐の口では食べる事ができません。狐は食べたくも、食べよー無く、たゞ、その廻りを、あちこちと歩いてゐるので、鶴狐さん、お嫌いですか、なぜ食べないで、舞を舞ふてますか、舞は、食べての後になさい』とゆーて、かたきを取つたそーです。この話は、自分のよく出来る(と)を鼻にかけて、他人を苦しめるものでないとの、心なのです。

*ページ上部に The fable of a crane and a fox. とある。

（挿絵）

● 黄金の鶏卵

むかし、ある婆さまが、鶏をかつてましたが、黄金の卵を、毎日一つずつ産みますので、喜んでました。

しかし、日に、二つも三つも、産ませたいと、思つて、その鶏を打ちさいなみましたが、矢張一つきり産みません。

婆さまは、じれたく思ひまして、『この鶏のお腹には、黄金の塊りがあるのであらう、お腹を切りさして取らう』と、悪いことを出し、頭のさきから、脚のさきまで、すっかり切り開いて見ましたが、黄金は少しも見えず、その鶏は死んでしまひました

から、日に一つの卵も、得られなくなりました。婆さまは、一つづつもよかつた、鶏を殺さなければ……』と、後悔しましたが、もうおひつきません。

このお話を、少しつつでも、氣永くもうけよ、一度にどうぞ
もうけよ——元も子も無くす——おしめなのです。

* ページ上部に The hen that laid golden eggs (from *sic*) *Æsop's fables* にある。

第三号（明治二八年一月一日）

● 鷲と鳥の智。

ある時、鷲が牛を食べよーとしましたが、殻堅くて食べられず、殆ど途方にくれてました。鳥通りかづて、之を見、『それは、雑作なく食べられますよ。御伝授しませうか。其の代り、半分だけ、私に頂戴。』

といひますので、鷲は喜んで、『どうぞ教えて下さい。半分上げますから……』と約束しました。

そこで、鳥は、どんな事を教へましたらうか。

『それを、高い空からおとせば、殻は、一も一も無くわれますよ。』

と教へましたので、鷲は、教へられた通りにして、其の半を、鳥に分けたさうです。

鷲と鳥とを比べますと、鷲の方が、力も強く、位も高いです。が、鳥に劣るなど、無いとも申されません。人間も、身分が貧しいからといふて、その人を侮るいとは出来ません。

（挿絵）

* ページ上部に The eagle which was guided by the wisdom of the crow (*Æsop's fables*) にある

『少年智識画報』
第三号（明治三八年一月一日）

（挿絵）

（十一） 鷲と矢

昔し獵夫が、山で鹿を射止めました。すると、高い樹の梢から、之を見て居た鷲が「うまく中つた、あれは、矢がよいからだ、なんでも弓の矢は、鷲の羽（我々の羽）に限ると自慢しました。暫くすると、獵夫は樹の上に鷲の居るを見出し、狙ひ寄て、又鷲を射落しました。其時に、鷲が「ざんねんだ、我の羽で我が殺された」と悔て死にました。

なんでも、他人を傷る道具になると、又自分が傷められる

時節が来ます。

* ሚኑ ተናሸሩ The eagle and arrow. ሚኑ ተናሸሩ

第四号
(明治三八年二月一日)

* ° 一 „ 上篇 A Wolf and a Crane. 上篇

行きました。
わるもの くち の わるもの くち の
うつかりと悪者の口に乗ると、飛んだ目に逢ふものです。

一羽の鶴が、何か食物はないかと、そこ此處歩いて居ると、直ぐ傍の樹の蔭から、「もしお鶴さん」と呼ぶものがある、大層叮嚀に呼ぶが、ハテ不思議な事だと、鶴は「へながら傍に行きますと、狼はぼろ／＼涙をこぼして、私は今魚の骨を喉に立て、大変困つて居る処だから、何卒骨を取つて下さい、お礼は何でもしますから」となきれない声を出して言ひました。

鶴もお腹が空つた処だし、幸の事だから骨を取つて遣つて、お礼でも貰おうと思つて、その長い嘴を、狼の開いたきりで、さつさと行こーとするから、鶴は驚いて、「おい／＼狼さん、約束のお礼を貰おばやないか」とゆーと、狼は振り返つて、「ナニお礼だと、馬鹿を言うな、お前が嘴を乃公の喉に入れた時、乃公がこの歯で一つ噛みしめたら、夫きりお前の生命は無かつたのだ、夫を無事に助けて貰つたのは誰のお蔭だと思ふ、馬鹿ものめ」と牙をあらはし、眼をむき出して怒鳴りました。

鶴は其勢に吃驚して、お礼どころか生命からぐに逃げて

(四) 太陽と北風
ある時太陽と北風とが出逢ひ、何方が力が強いかとゆ一
話から、争ひとなり、中々果しが付きませんでした。
すると、其下の方を一人の旅人が通りかうたのです、太陽は
北風に向ひ、「お互にどれ程口で言ひ合つても果しがないか」と
ら、幸ひ今下を通るあの旅人の着物を、脱がした方が勝ちと
仕よ。いやないか」とゆーと北風は承知をして、「宜しい、然しか
らば拙者から始めて、直ぐ脱がして御覧に入れると、「早速支

第六号（明治二八年一二月一日）

* ९ 一 ८ 上 論 に A. Woodman and the Deity of Rivers. と 題 す。
（挿 絵）

第八号（明治二九年四月一日）

ひとりきこりときかほそほしごと居ましたが、どう一人の樵夫がある時、河の傍で仕事をして居ました。が、どうした機か斧を河の中へ落しました。大切な職業道具を落しては、明日から稼ぐ事が出来ないと、大層悲しんで居ますと、やはのかみあらそくのわけ河伯が表はれて其澤(ママ)を聞いて、よしと探し出して遣ろ。河の底に沈んで、やがて金の斧を持って来て、「汝の落したのは是か」と聞きました樵夫は、「イエ、そんな立派なのではありません、」と云うので河伯はまた中へ入つて、今度

は銀の斧を持出して見せましたが、いえ夫でもありますんとゆ
一ので、三度目に鉄の斧を持つて出て、是かと聞きますと、樵夫
（たいそりょかん）は大層（おほへう）んで、「はい／＼（はい／＼）」
伯（おじ）は、「汝（おまへ）は實（じつ）に正（ただ）直（ちか）
（のつか）者（もの）だ、人間は其（その）心（こころ）を持つて居（ゐ）なけれ
ば（ば）」
（のつか）者（もの）だ、人間は其（その）心（こころ）を持つて居（ゐ）なけれ
ば（ば）」

下さいました。くだらぬ成らぬ」と言ひて其鉤の糸に金銀の斧まで添へて樵夫にて、「汝の落したのは是か」と聞きました。

挿絵

「お父様、お前の家に大層美しい娘が居るそー
だが、乃公を其婿にして呉れ、何うだい」と談判した。
老夫は困ったが、断れば乱暴をするだろーと思つたから、う
まい謀計を考へて、

「夫は實に難有い事だ、お前さんが婿に来て呉れれば、大層幸福だが、娘がど一もお前さんの、その恐ろしい牙を怖がつていけないから、何卒それを抜いて来て呉れないか。」

「よし／＼、乃公を婿にして呉れば牙でも何でも抜いて了う、と言つて、山に帰り、牙から前歯からそつくり抜いて、さあ是でよしと、すつかり身支度して婿入りにやつて来て、坐敷に通つて、すまし込で坐つて居た。

獅子は吃驚して大きに腹を立ち、「この老爺何をする」と飛びかうて喰ひ付こーとしたが、いけない、牙も歯も抜いて了つたのだから、喰む事が出来ない、そこで始めてこの老夫に、だまされただとゆ一事が判つたが、何うも仕方がなく、ほーーの体

で山に逃げ帰つた。
獅子のよ一な強い獸でも、かんじんの牙を取られゝば、やつ
ぱりだめである。

* ° 〽 — „ 〽 A Lion's Marraige (sic). 〽 *

か、」と口裡しがつたけれども、最も致方がなかつた。
ナハドヒの勝負は兔の負けと成つたのである。
*「一々上品に The Race between the Rabbit and the
Tortoise. ふね。

一　吉見孝夫「明治期の雑誌に載つたイソップ寓話」(『イ

ソツナ資料】第一号、一九一八年一〇月、
二 『面白草紙』第八号の笑話は以下の如き

伊蘇普物語の新落語 面白絵 そつぶものがたり 第1号 いのうの笑話は以下のとおり

(四) 兎と亀
かめ「おい兎公、お前と乃公と歩き競をしよーぢやないか。」
うさぎ「なんだ、乃公とお前と歩き競をするといやぢよーだ
んを言つちやいけない、お前のよーに、四つ這で、むづーーした
者かみが、なに乃公に勝てるものか。」

かめ「勝てるか勝てないか、一つやつて見よ。」
うさぎ「なまいきな事を言ひなさんな、併し夫程ゆ一のなら、
相手に成つて遣ろ。」

と、そこで兎と亀どが支度をしてある所まで歩きくらをした。

兎はずん／＼歩いて後ろを見ると、亀は余つ程後れて居る、えこの安排ならもうとゆつくりしてもいい、どれ爰で昼夜でもしよーか、と兎はこうりと草の上に寐て了つた。

其内最う日も暮れかつたので、兎は目をさまし、あゝおそく成つた、どれ／＼出掛けよーかと、起上つて道草を喰ひながら、ゆつたりのつたり歩いて、約束の所まで行くと、亀は疾うに来て居て、「おい兎公何うだ、夫でも勝つたか、アハハ」と笑つ

た。
うなぎ　おとぎ　それ
おれ　ね　み　うち　さき　き
兎は驚いて、え、夫ぢやあ乃公の寐て居る内に先へ來たの

一九八七年九月)

四 鈴木潤吉「鈴木三重吉とイソップ」(『イソップ資料』第一二号、二〇一九年一二月)

五 関場不二彦の事跡は次の文献に拠る。

秦温信『北辰の如く——関場不二彦伝』(北海道出版企画センター、二〇一一年三月)

明治期雑誌掲載イソップ寓話対照表

- 1 寓話の配列は B. E. Perry の *Aesopica* の番号に従った。 *Aesopica* ない寓話は、James 本の番号を「J59」のように略記した。James 本、Townsend 本にもなく、Stickney 本にある寓話は、「S5」のように略記した。
- 2 *Aesopica* のタイトル名は、1 ~ 471 は中務哲郎訳『イソップ寓話集』(岩波書店、1999 年 3 月) に、472 ~ 579 は岩谷智・西村賀子訳『イソップ風寓話集』(国文社、1998 年 1 月) に従った。ただし、漢字表記は極力常用漢字の範囲にとどめるため改めた。他は Perry の *Babrius and Phaedrus* (Harvard University Press, 1965) の英文タイトルを和訳した。
- 3 各雑誌には、次のような略記を用いた。

R : ROMAJI ZASSHI 教 : 『教育小供のはな誌』 同 : 『DOSHISHA 文学会雑誌』
 女 : 『女学雑誌』 国 : 『小国民』 こ : 『こども』 学 : 『小学生徒之友』
 園 : 『少年園』 幼 : 『幼年雑誌』 家① : 民友社系『家庭雑誌』
 花 : 『花の園生』 文 : 『少文林』 誌 : 『少年新誌』 婦 : 『婦人と子ども』
 羽 : 『羽陽之少年』 万 : 『万年艸』 福 : 『福音新報』
 家② : 由分社系『家庭雑誌』 帝 : 『帝国文学』 を : 『をんな』
 新 : 『新古文林』 画 : 『少女智識画報』 智 : 『少年智識画報』
 英 : 『英語之日本』
- 4 各雑誌の巻号は、漢数字で巻を、算用数字で号を示した。

Aesopica等の番号とタイトル	掲載雑誌と掲載箇所
4 ナイチンゲールとタカ	花35
9 井戸の中のキツネとヤギ	婦三9・家②2
10 ライオンを見たキツネ	R16・誌4・英二2
11 箫を吹く漁師	婦三4
12 キツネとヒョウ	婦四10
15 キツネとブドウ	英二10
17 しつぽのないキツネ	教4・こ13・婦三11
24 腹のふくれたキツネ	婦四11
27 キツネとモルモーの面	家①19
29 炭屋と洗濯屋	婦三4・新1
32 人殺し	婦五5
33 ほら吹き	婦三12
35 人間とサテュロス	新3
40 天文学者	婦四4
42 農夫と息子たち	R10・婦四5・を五8
44 王様を欲しがるカエル	家①16・英二13・英三7
45 牛と車輪	婦三10
46 北風と太陽	R8・婦三2・福405・新1・智4
49 子牛を盗まれた牛飼いとライオン	婦三5
50 イタチとアプロディテ	新3
51 農夫と蛇	婦四2
53 兄弟げんかする農夫と息子	R2・R19・婦三3
55 女主人と召し使い	を四11・新5
57 老婆と医者	婦四4・新5
58 女とメンドリ	新3
60 老人と死に神	新1
64 犬にかまれた男	新3
65 旅人とクマ	学9・婦三11
67 旅人とおの	婦四7
68 敵同士	新3
69 隣同士のカエル	英二6・英二7
70 カシとアン	婦四7
75 片目の鹿	新1
77 鹿とブドウ	女255
80 ハエ	婦三6
81 王に選ばれた猿とキツネ	婦四5
85 子豚と羊	婦三12
87 金の卵を生むガチョウ	女144・婦四11・画2
88 ヘルメスと彫刻家	新5
91 じゃれつくロバと主人	R12
93 マムシとヤスリ	学46・学47
97 子ヤギと笛を吹くオオカミ	幼一14
98 屋根の上の子ヤギとオオカミ	R6 婦四4

112 アリとセンチコガネ	R4・家①19・婦三4・教5・こニ2・学17・英ニ11・英ニ13
122 泥棒とオンドリ	婦四10・花34
124 カラスとキツネ	R14・学45・家①17
130 胃袋と足	R10・婦四5
133 肉を運ぶ犬	女136・こ11・家①19・婦三5・誌3・英ニ3
140 恋するライオン	女247・婦三11・智8
142 老いたライオンとキツネ	婦三10
147 ライオンとクマ	婦四10
148 ライオンとウサギ	婦四10
149 ライオンとロバとキツネ	婦四11
150 ライオンとネズミの恩返し	R1・同13・婦三2・福405・家②1・英ニ8・英ニ9
155 オオカミと子羊	R3・家①16・家①19・婦三2・家②1・誌2・英ニ1・英ニ2
156 オオカミとサギ	R15・家①19・婦三3・智4・英ニ11
157 オオカミとヤギ	学40・英ニ6・英ニ7
158 オオカミと老婆	こ12
172 コウモリとイタチ	婦三3
173 きこりとヘルメス	こ9・婦六2・智6
177 旅人と薪	新5
180 塩を運ぶロバ	婦四2
181 ロバとラバ	女159
182 神像を運ぶロバ	新5
184 ロバとセミ	婦三2
188 ライオンの皮を被ったロバ	万四・英ニ7
191 ロバとキツネとライオン	婦三6
193 獅師とヒバリ	新5
194 獅師とコウノトリ	R13・婦三8
199 子供とサソリ	婦三5
201 のどの渴いたハト	婦三9
202 ハトとハシボソガラス	花35
210 羊飼いのいたずら	婦四1
211 水浴びをする子供	新3
212 毛を刈られる羊	女243
213 ザクロとリンゴとイバラ	婦三7
214 モグラ	こニ1・婦三5
224 イノシシとキツネ	婦四7・婦八6・学17
225 守銭奴	婦三12
226 カメとウサギ	R7・同13・こ12・婦一7・婦三4・智8
229 ツバメとハシボソガラス	婦三3
230 カメとワシ	婦三8・教4
235 アリとハト	R22・婦四8・婦五6
252 犬と鶏とキツネ	R7
257 ライオンとキツネ	婦三6
266 振り分け袋	新1
276 射られたワシ	婦四8・智3
281 タナグラのオンドリ	婦四5
283 火を運ぶキツネ	婦四10
284 一緒に旅をする人間とライオン	婦三7
288 クマとキツネ	婦三8・家②2
290 牛と肉屋	婦四2
291 牛追いとヘラクレス	婦三5
303 きこりと松	R13?
305 病氣の鹿	婦四2
314 太陽とカエル	新1
322 カニと母親	婦四6・新3・英ニ10・英ニ11
324 病氣のカラス	新5
325 ヒバリと農夫	英ニ4・英ニ5
326 膿病(おくびょう)な獅師	婦四11
330 犬と主人	婦三3
331 犬とウサギ	婦四11
334 ライオンの治世	婦三3
335 ライオンとワシ	婦五5
338 ライオンとイノシシ	婦四8
339 ライオンと野生のロバ	家①18・家①19・婦四6
351 子牛と鹿	R21・婦三6
352 田舎のネズミと町のネズミ	教3
353 ネズミと牛	花34
355 旅人と眞実の女神	婦五5
370 ラッパ兵	新3
373 セミとアリ	R4・こニ2・家①19・婦三4・教5・学17・英ニ11・英ニ13
376 自分を膨らませるヒキガエル	R13・家①17・婦四4
378 二つのつぼ	新1
384 ネズミとカエル	R6・こ11・婦四6

390 ハシボソガラスと水差し	婦五6
394 ライオンの子分のキツネ	婦五5
398 カラスと白鳥	婦三9
413 イチジクとオリーブ	福405
419 泥棒と宿屋の主人	新3
426 キツネとツル	R19・ニニ4・幼一3・婦五11・画1
447 父親を埋葬するヒバリ	新3
460 ロバの陰	婦四8・新5
468 月と母親	新5
472 高慢ちきなカラスとクジャク	R5・家①19・万四
473 ウサギに講釈するスズメ	家①19
474 猿に載かれるオオカミとキツネ	家①19
490 ワシとカラス	画3
499 姉と弟	新3
503 ニワトリのヒナと真珠	R15・婦三3
520 大山鳴動して	R25・婦三8・新1
532 老犬と狩人	R5 婦四7
562a オンドリとキツネ	女136 万五
563 ライオンと羊飼い	ニ8・万五
563a アンドロクルスとライオン	学24・婦三7
566 コウモリ	ニ13・羽6
580 欲張りとねたみ屋	誌4
613 ネズミ、猫のことを協議する	ニ10・婦四7・国1・英三7
617 男の胸の中の蛇	R16・婦三7
702 飼い葉おけの犬	学45・学46・婦三10
716 ネズミと雌の子ネズミ、オンドリと猫	家①20・英二9
721 父親と息子とロバ	幼一6・帝10
J59 木々とオノ	英二11
J130 少年とイラクサ	婦四4
J147 少年とハシバミ	婦三12
J172 少年たちとカエル	文二5・婦四1
S5 太鼓と香草の花瓶	英二6
S88 猿と猫	ニ9
イソップ伝(イソップの伝記)	園46
イソップ伝(財布を拾った人に難癖を付ける話)	婦六9
イソップ伝(イソップが「町までどのくらいかかるか」と尋ねられる話)	万五

の原本も同様に脱落している。

XVII.— The Mice in Council.

1. Some little Mice, who lived in the walls of a house, met together one night, to talk of the wicked cat, and to consider what could be done to get rid of her. The head Mice were Brown-back, Grey-ear, and White-whisker.

2. "There is no comfort in the house," said Brown-back; "if I but step into the pantry to pick up a few crumbs, down she comes, and I have hardly time to run to my nest again."

XVII.—鼠の評議。

1.或る家の壁に住まつて居た小鼠が、或る晩寄り合つて、家の悪猫の話をし、何うしたら彼奴の厄介扱ひが出来ようかと、相談会を開きました。鼠の親分は褐背と灰耳と白鬚の三匹でした。

2.先づ褐背が言ひますには、「此の家は些つとも気楽でない。己れが一寸台所へ這入つて麺包屑を拾はうとすると、あの猫の奴がやつて来て、己れは危ない処をやつと逃げ出して巣へ帰るのだ。』

his head! This is a King indeed. He shall rule over us," and they went joyfully to meet him.

9. But as their new King came nearer, he paused, stretched out his long neck, picked up the head Frog, and swallowed him at a* mouthful. And then the next — and the next!

10. "What is this?" cried the Frogs, and they began to draw back in terror.

But the Stork with his long legs easily followed them to the water, and kept on eating them as fast as he could.

11. "Oh! if we had only been — " said the oldest Frog. He was going to add "content," but was eaten up before he could finish the sentence.

12. The Frogs cried to Jupiter to help them, but he would not listen. And the Stork-King ate them for breakfast, dinner, and supper, every day, till in a short time there was not a Frog left in the lake.

* a は Stickney の原本では one。

XVI.— The Ass in the Lion's Skin.

1. An Ass once put on a Lion's skin. It did not fit him very well, but he found that in it he could frighten all the timid, foolish little animals, so he amused himself by chasing them about.

2. By and by he met a Fox, and tried to frighten him by roaring.

"My dear Donkey,* said the wise Fox, "you are braying, and not roaring. I might, perhaps, have been frightened by your looks, if you had not tried to roar; but I know your voice too well to mistake you for a Lion."

* 二重引用符が脱落している。 Stickney

きました。

9.ところが、今度の王様は傍へ来ると立止まつて、長い頸を差し伸ばし、親分の蛙を啣へ上げて一と口に呑んでしまひました。其れから次へ次へとずんずん蛙どもを食べました。

10.蛙どもは『此れは何事だ。』と叫んで、恐れて引っ込み出しましたが、鶴は、長い脚でわけなく蛙どもを追つ掛けて行つて、ぐいぐい食べました。

11.一番年上の蛙は『あゝ、己れ達はたゞもう……』と言ひ掛けましたが、『満足さへして居たら善かつたものを』と言ひ切らぬうちに、食べられてしまひました。

12.蛙どもは大声に叫んでデュピタの命に助を求めるけれども命は御聞き入れになりませんでした。そこで鶴王は、朝飯に、昼飯に、夕御飯に、毎日毎日蛙を食べましたから、間もなく池の蛙が一匹も残らぬ様に無くなりました。

XVI.—獅子の皮を着た驢馬の話。

1.我(ママ)る時驢馬が獅子の皮を着ました。あまりよく体に合はなかつたけれども、此の皮を着て居れば臆病者の愚かな小さい獸を皆嚇かす事が出来ると思ひましたから、獸を追ひ廻して面白がつて居りました。

2.斯くするうちに狐に会ひましたから、一つ嚇かしてやらうと獅子の声色を使いました。

所が狐は中々怜憐ですから、『や、驢馬君、それや驢馬の声だよ獅子の吼声ぢやない。君が獅子の声色なんか真似なかつたなら、其の顔付で嚇かされたかも知らぬが、僕は君の声をよく知つて居るから君を獅子には間違へないよ。』と言ひました。

4. It fell with such a splash that the frogs were frightened, and hid themselves in the deep mud under the water.

5. By and by, one braver than the rest peeped out to look at the King, and saw the Log, as it lay quietly on the top of the water. Soon they all came out of their hiding places, and ventured to look at their great King.

6. As the Log did not move, they swam round it, and at last one by one hopped upon it.

"This is not a King," said a wise old Frog; "it is nothing but a stupid Log."

* Stickney の原本では were の後に once がある。

つて水の中へ大きな丸太をお投げになりました。

4. 丸太はバサンと大きな音を立てゝ水をはねとばして落ちたので、蛙は驚愕して、水の底の泥の中へ隠れました。

5. 暫く立つてから、一番勇気のある蛙が顔を上げて王様を覗いて見ると、例の丸太が水の上に静かに浮いて居ました。やがて蛙はみんな隠れ場から出て来て、恐はい乍らも自分達の大王様を見ました。

6. 丸太は動かないもんですから、蛙達は其の周囲を泳ぎ廻つて、どうどう一匹々々其の上へ飛び上りました。

『此れや王様ぢや無いや。何でも無いよ。愚図の丸太めだい。』と利口な年寄の蛙が申しました。

第三卷第七号（明治四三年六月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語研究

（第十三）

（第式卷第拾参考『いそつぶ物語詳解』より続く）

長谷川元吉

7. 蛙どもは再びデュピタの命の所へ使を遣つて、私等の支配が出来る王様を下さいと頼みました。

デュピタの命はまた馬鹿な蛙がやつて来てうるさいとお思召したけれども、『さあ、支配をする王様を上げませう』と言つて、今度は大きな鶴を送つて御遣りになりました。

8. 蛙どもは鶴が厳然として湖水の方へ歩いて来るのを見て喜びました。

『まあ、御覧よ、素敵だね。あの大股に歩くこと、反身になつて。此れや全く王様だ。支配をして貰はう。』と言つて大に喜びながらお迎ひに行

7. Again they sent to Jupiter, and begged him to give them a King who could rule over them.

Jupiter did not like to be disturbed again by the silly Frogs, but this time he sent them a Stork, saying, "You will have some one to rule over you now."

8. As they saw the Stork solemnly walking down to the lake, they were delighted.

"Ah!" they said, "see how grand he looks! How he strides along! How he throws back

said she, "will you not lend me a little food? I will certainly pay you before this time next year."

4. "How does it happen that you have no food of your own?" asked an old Ant. "There was an abundance in the field where we lived all Summer, and your people seemed to be active enough. What were you doing, pray?"

5. "Oh," said the Grasshopper, forgetting his* hunger, "I sang all the day long, and all the night, too."

6. "Well, then," interrupted the Ant, "if you found it so gay to sing all the Summer, you may as well try to dance away the Winter," and she went on with her work, all the while singing the old song:—

"We ants never borrow; we ants never lend."

* 2では she とあるので、his は her とあるべきところ。Stickney の原本も his.

XV.— The Frogs Who Asked for a King.

1. There were* some Frogs who lived together in a beautiful lake. They were a large company, and were very comfortable, but they came to think that they might be still happier if they had a King to rule over them.

2. So they sent to Jupiter, their god, to ask him to give them a King.

3. Jupiter laughed at their folly, for he knew that they were happier and better off as they were; but he said to them, "Well, here is a King for you," and into the water he threw a big Log.

少し食べ物を貸して呉れませんか。来年の今頃にならぬうちにきつと返しますよ。』

4.『君達は何うして自分の食物が無い様な事になつたんですか。夏中住まつて居た畠にどツさり食物が有つたぢやありませんか。そしてお家のの方は随分はきはきして居らした様ですが、一体何をして居らしたんですか。』と年寄りの蟻が申しました。

5.蟻は飢を忘れて申しますには、『私は昼は日ねもす、夜も夜もすがら、楽しく唄ひ暮らしまして』

6.『はあ、左うですか』と蟻は蟻の言葉を遮ぎつて、『夏中唄ふのが其んなに面白かつたのならば、冬は一つ踊つて暮して見たらばいいでせう』と言つて、又仕事をつづけて致しました、始終此の古い歌を唄ひながら;—

『吾等は、蟻は、借りもせず、
吾等は、蟻は、貸しもせず。』

XV.—王様を望んだ蛙の話。

1.蛙が一所に或る美しい池に住まつて居ました。余程な大勢で愉快に楽んで居ましたが、王様が有つて自分達を支配してくれれば猶ほ幸福になれるだらうと考へる様になりました。

2.そこで、蛙は自分達の神様であるジユピタの命の所へ使を遣つて王様を一人下さいと頼みました。

3.ジユピタの命は蛙達の愚かなをお笑ひになりました。其れは命は蛙は今まで王様を戴かず居るのが王様が有るよりも幸福であるといふ事を知つて居らしたからです。けれどもジユピタの命は『よろしい、ソラ王様をあげよう』と言

1. Once upon a time a man came to a forest to ask the Trees if they would give him some wood to make a handle for his Axe.

2. The Trees thought this was very little to ask, and they gave him a good piece of hard wood. But as soon as the man had fitted the handle to his Axe, he went to work to chop down all the best Trees in the forest.

3. As they fell groaning and crashing to the ground, they said mournfully one to another, "We suffer for our own foolishness."

XIV.— The Ants and the Grasshoppers.

1. The Ants and the Grasshoppers lived in the great field. The ants were busy all the time gathering a store of grain to lay by for Winter use. They give* themselves so little pleasure that their merry neighbours, the Grasshoppers, came at last to take scarcely any notice of them.

* give は Stickney の原本では gave。

第二卷第一三号（明治四二年一二月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

(第 十 二)

長 谷 川 元 吉

XIV.— The Ants and the Grasshoppers.

2. When the frost came, it put an end to the work of the Ants and the merry-making of the Grasshoppers. But one fine Winter's day, when the Ants were employed in spreading their grain in the sun to dry, a Grasshopper, who was nearly perishing with hunger, chanced to pass by.

3. "Good day to you, kind neighbour,"

1.或る時一人の男が森へ来て、森の樹に向つて、斧の柄を挿へるのだから、木材を少し呉れないと申しました。

2.森の樹達は、此れやお安い願だと思つて、堅い良い木片を男にやりました。所が其の男は斧に柄をはめるや否や、また森へ行つて二番良い樹を悉く切り倒しました。

3.森の樹達は呻きながら土地へどさんと落ちてお互に悲しさうに話し合ひました、『己いら、まあ、自分の愚かさで苦しむのだ』と。

XIV.— 蟻と螽斯との話。

1.蟻と螽斯とが大きな畠に住まつて居ました。蟻は、冬ごもりの準備に穀物を集めるので始終忙しく、少しも遊び楽しむ様な事が無かつたから、近所に住まつて居る陽気な螽斯は蟻を相手にしない様になりました。

XIV.— 蟻と螽斯との話。(つづき)

2.さうするうちに霜が降る様になつて、蟻の仕事も螽斯の遊びもお終になりました。所が或る天気の好い冬の日に蟻が穀物を日向に広げて干して居ますと、殆んど餓え死にしかつた螽斯が、其所を通り掛かりました。

3.螽斯が申しますには『蟻さん今日は。あなた

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

(第十一)

長谷川元吉

XI.— The Crab and Its Mother

4. The little Crab smiled. "When you learn to do it yourself, you can teach me," he said, and he went back to his play.

5. Example is better than precept.

XII.— The Wolf and the Crane.

1. One day a Wolf, who was eating his dinner much too fast, swallowed a bone, which stuck in his throat, and pained him very much. He tried to get it out, but could not.

2. Just then he saw a Crane passing by. "Dear friend," said he to the Crane, "there is a bone sticking in my throat. You have a good long neck; can't you reach down and pull it out? I will pay you well for it."

3. "I'll try," said the Crane. Then he put his head into the Wolf's mouth, between his sharp teeth, and reached down, and pulled out the bone.

4. "There!" said the Wolf, "I am glad it is out; I must be more careful another time."

"If you will pay me, I will* go now," said the Crane.

5. "Pay you, indeed!" cried the Wolf. "Be thankful that I did not bite your head off when it was in my mouth. You ought to be content with that."

* will は Stickney の原本では will。

XIII.— The Axe and the Trees.

XI.—蟹と其の母蟹との話。(づき)

4. 子蟹は此を見て笑ひました。『お母様が御自分で真直に歩ける様になつてから教へるがいゝや』と言つて復た遊びに行きました。

5. 講釈するよりもやつて見せるが善い。

XII.—狼と鶴との話。

1. 或る日狼が余り急いで御飯を食べたので、骨を呑んで喉へ立つて大変痛みました。抜かうとしたけれども抜けませんでした。

2. 丁度其の時鶴が通り掛かつたのを見て『や鶴君、僕は喉へ骨が引掛かつた。君は随分頸が長いから、僕の喉へ差し込んで骨を抜いて呉れませんか、御礼はビツさりますよ』と申しました。

3. 『一つやつて見よう。』と言つて鶴が自分の頭を狼の鋭い歯の間から口の中へ入れて、ずつと喉の奥まで嘴を差し込んで骨を抜きました。

4. 『やあ、骨が抜けて嬉しい。今度はもツと気を付けねやならん』と狼が申しますと、鶴は『御礼を払つて下されば僕はもう行きませう』と申しました。

5. すると狼が大きな声で申しましたのには、『お礼を払へつて、まあ。お前の頭が僕の口の中へ這つて居た時に僕がお前の頭を噛み切つてしまはなかた(ママ)のを有難く思へ。其れでお前は満足するがよい。』

XIII.—斧と樹との話。

would be acceptable, when, looking up, he spied some great clusters of ripe, black grapes, hanging from a trellised vine.

2. "What luck!" he said; "if only they weren't quite so high, I should be sure of a fine feast! I wonder if I can get them? I can think of nothing that would refresh me so."

3. Jumping into the air is not the easiest thing in the world for a Fox to do; but he gave a great spring, and nearly reached the lowest clusters.

"I'll do better next time," he said.

4. He tried again and again, but did not succeed as well as at first. Finding, at last, that he was losing his strength, and that he had little chance of getting the grapes, he walked off slowly, grumbling, "The grapes are sour, and not at all fit for my eating. I'll leave them to the greedy birds. They eat anything."

XI — The Crab and Its Mother.

1. "My child," said a Crab to her son, "why do you walk so awkwardly? If you wish to make a good appearance, you should go straight forward, and not in that one-sided manner."

2. "I do wish to make a good appearance, mamma," said the young Crab; "and if you will show me how, I will try to walk straight forward."

3. "Why this is the way, of course," said the mother, as she started off to the right. "No, this is the way," said she, as she made another attempt, to the left.

た丁度其時に上を見たらば、実れて黒くなつた葡萄の大きな房が葡萄棚の上を逼つて居る蔓から釣る(ママ)さがつて居りました。

2.『これや有難い。たゞもう少し低けれや素敵な御馳走を食べられるんだけどな。其れとも取れるか知らん。こんな旨まいものは外に無さそうだぜ。』と申しました。

3. 一体空に跳び上がる事は狐にとつては楽な事ではありませんけれども、彼は一跳び高く跳んで、一番下の房まで殆んどとづきました。

『今度はうまくやらう』と言つて、

4.幾度も跳んで見ましたが初め程うまく跳べません。力は段々抜けるし逆も葡萄を取れる見込みがない事が解りましたから、ぶつぶつ言つて逃げました。『葡萄は酸っぱくて己れの口には合はないから、食辛棒の鳥たちに遺して置いてやらう。彼い奴等は何でも食べるから。』

XI.—蟹と其の母蟹との話。

1.『坊や、お前は何故そんな無恰好な歩き方をするんだね。様子をよくしようと思へば其んな横這ひをしないで、前へ真直ぐ歩くんですよ。』と蟹が其の息子に申しました。

2.すると蟹が申しますには『其れやおつ母様、僕も様子をよくし度いんですけど。おつ母様が仕方を教へて下されば真直ぐ歩きませう。』

3.『なに、わけない事だ、無論斯うして歩くんです。』と言つて母蟹は右の方へ歩き出しましたが、『いや斯うだ。』と言つて今度は左の方へ歩きました。

2. "All at once he stretched his long neck, and opened his mouth so wide, and roared so loud, that I thought he was going to eat me up, and I ran home as fast as I could. I was sorry that I met him, for I had just seen a lovely animal, greater even than he, and would have made friends with her. She had soft fur like ours, only it was gray and white. Her eyes were mild and sleepy, and she looked at me very gently, and waved her long tail from side to side. I thought she wished to speak to me, and I would have gone near her, but that dreadful thing began to roar, and I ran away."

3. "My dear child," said the mother, "you did well to run away. The fierce thing you speak of would have done you no harm. It was a harmless Cock. But that soft, pretty thing was the Cat, and she would have eaten you up in a minute, for she is he* worst enemy you have in the whole world."

* he は the の t の誤脱。Stickney の原本では the。

ました。

2.『急に長い頸を伸べて、口を大きく開いて、それや大変な声で吠えましたから、此れは僕を食べてしまふのだと思つて、一生懸命で駆けて帰りました。あの奴に出てくはさなかつたらよかつたんですけどね、といふのは、其のつい前に、もつと大きい可愛らしいものに会ひましたから、御友達になる所であつたのです。其の可愛らしいものは、たゞ灰色と白との斑な所が違つてゐるだけで、やつぱり僕達のと同じ様に軟かい毛皮を着て居ました。柔軟な睡むような眼をして居ましたが、僕をおとなしい眼付きで見て、長い尾をあちこちへ振りました。僕に何か話し度がつてゐる様でしたから僕は其の傍へ行かうと思ひましたけれども、あの恐はい奴が吠え出したので逃げました。』

3.母鼠は此を聞いて申しました、『お前は逃げて来てよかつた。お前の謂ふ其の猛いものは鶏といふもので何も害をするのではなかつたらう。けれどもその温軟な綺麗なものは直きにお前を食べてしまふ處であつた。あれは世界中で一番悪いお前の仇敵だから。』

第二卷第一〇号（明治四二年一〇月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

（第 十）

長谷川元吉

X.一狐と葡萄との話。

1.或日のこと大変蒸し暑かつたので、狐は餓えと渴きとの為に殆んど死にかゝつて居りました。何でもいいから食べ度いと独言を言つて居りました。

X.— The Fox and the Grapes.

1. It was a sultry day, and the Fox was almost famishing with hunger and thirst. He was just saying to himself that anything

4. It befell the great Lion, not long afterward, to be in as evil a case as had been the helpless Mouse. And it came about that his life was to be saved by the keeping of the promise he had ridiculed.

5. He was caught by some hunters, who bound him with strong rope, while they went away to find means for killing him.

第二卷第九号（明治四二年九月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

(第九)

長谷川元吉

VIII.—獅子と鼠との話。

6. Hearing his loud groans, the Mouse came promptly to his rescue, gnawed the great rope, and set the royal captive free.

7. "You laughed," he said, "at the idea of my being able to be of service to you. You little thought I should repay you. But you see it has come to pass that you are as grateful to me as I was once to you."

8. The weak have their place in the world as truly as the strong.

IX.—The Mouse, the Cat, and the Cock.

1. A young Mouse, that had not seen much of the world, came home one day and said, "Oh, mother! I have had such a fright! I saw a great creature strutting about on two legs. I wonder what it was! On his head was a red cap. His eyes were fierce and stared at me, and he had a sharp mouth.

4. 其れから間もなく獅子大王が丁度此の可哀相な鼠が遭つた様な酷い目にあひました。そして先きに自分が馬鹿にした、あの約束を鼠が守れば獅子の命は助かるといふ有様になりました。

5. といふのは獅子が獵人に捕はれたのです。獵人は獅子を強い綱で縛つて置いて、獅子を殺す獲物を取りに行きました。

VIII.—獅子と鼠との話。

6. 獅子が大きな声で唸つて居るのを鼠が聞きつけ、直ぐ様救ひに来て、太い綱を噛み切つて放してやりました。

7. 其の時鼠が申しましたには、『獅子様あなたは私が御恩報じをしますと言つた時に私の様な者が何の役に立つものかと思つて御笑ひになりました。私が御恩返しをするなどゝは夢にも御思ひなさらなかつたけれども、御覧なさい、此間私があなたに対して有難く思つた様に、今日はあなたが私に対し有難く思ふではありませんか。』

8. 世の中は、強いものだけでなく弱い者も、相応に自分の立場があるものだ。

IX.—鼠と猫と鶏との話。

1. まだ世の中をあまり見た事の無い若い鼠が或る日外から帰つて来て申しましたのには、『まあ、おッカ様、僕はほんとに驚愕したの。二本の足で威張つて歩く大きなものを見ましたが、あれは一体何だつたでせう。頭には赤い帽子を被ぶつて居ました。眼は鋭い眼、其れでもつて僕を睨み付けたの。そしてまた其の口は尖がつて居

6. The next time the Frog from the pond came to visit his friend, he could not find him.

"Too late!" sang a Bird, who lived in a tree that overhung the pool.

"What do you mean?" said the Frog.

"Dead and gone!" said the Bird. "Run over by a wagon and killed, two days ago, and a big Hawk came and carried him off."

7. "Alas! if he had only taken my advice, he might have been well and happy now," said the Frog, as he turned sadly towards home; "but he would have his way, and I have lost my friend."

8. Wilful people will not listen to reason.

* Stickney の原本では終止符。

6. 其後再び池の蛙が会ひに来た時には沼の蛙は居ませんでした。沼の上にかぶさつて居る木の鳥^{*}が轉つて『もう遅い』と申しました。『何んだつて』と蛙が言ひますと鳥^{*}が申しましたには『もう死んだまつたよ。車にしかれて、二日前に、そして大きな鷹が来て持つて行つちやつたよ。』

7.『まあ、僕の忠告を聞きさへしたなら今も丈夫で楽しく暮して居たらうのに、彼奴は自分の思ひ通りにして聞かなかつたから、僕も友達を失つた』と言つて池の蛙は悲しさうに帰つて行きました。

8. 我の強い人には道理を言つても聽き入れない。

* 「鳥」は「鳥」の誤植か。

第二卷第八号（明治四二年八月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

(第 八)

長谷川元吉

VIII.— The Lion and the Mouse.

1. It once happened that a hungry Lion woke to find a Mouse just under his paw. He caught the tiny creature, and was about to make a muthful of him, when the little fellow looked up, and began to beg for his life.

2. In most piteous tones the Mouse said, "If you would only spare my life now, O Lion, I would be sure to repay you!"

3. The Lion laughed scornfully at this, but he lifted his paw, and let his brave prisoner go free.

VIII.—獅子と屬鼠との話。

1. 或る時空腹の獅子^{すきはら}がふと眼を覚まして見ると丁度自分の足の下に屬鼠^{はつかねづみ}が居りました。そこで獅子は小さな鼠を掴まへて一口に食べようとしましたらば、鼠は見上げてどうぞ助けて下さいと言ひ掛けました。

2. 鼠は実に憐れな声で申しますには『おゝ獅子様、今私の命を助けてさへ下されば、きっと御恩報じは致します』。

3. 獅子は此を聞いて嘲笑ひましたが、足を挙げて大胆な鼠を放してやりました。

1. Once there were two Frogs who were dear friends.

2. One lived in a deep pond in the woods, where the trees hung over the water, and where no one came to disturb him.

3. The other lived in a small pool. This was not a good place for a Frog, or any one else, to live in, for the country road passed through the pool, and all the horses and wagons had to go that way, so that it was not quite like the pond, and the horses made the water muddy and foul.

第二卷第七号（明治四二年七月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

(第七)

長谷川元吉

VII.— The Two Frogs.

4. One day the Frog from the pond said to the other, "Do come and live with me: I have plenty of food and water, and nothing to disturb me; and it is so pleasant in my pond. Now here there is very little food, and not much water, and the road passed through your pool, so that you must always be afraid of passers-by."

5. "Thank you," said the other Frog; "you are very kind, but I am quite content here. There is water enough; those who pass never trouble me; and as to food, I had a good dinner day before yesterday. I am so used to this place, you know, and I do not like change. But come and see me as often as you can."

1.或る時仲好しの二匹の蛙が居ました。

2.一匹の蛙は森の中の深い池に住まつて居ました。其池は木が水の上へかぶさつて居てそして誰も蛙の邪魔に来る者は有りませんでした。

3.今一匹の蛙は小さい沼に住んで居ました。此沼は蛙だけでなく誰が住まふにも善い所ぢやありませんでした。といふのは田舎道が此沼を通り抜けて居て、馬や車は皆んな其道を通らねばならなかつたから、森の中の池とは事かはり、此所は馬の通行で水が濁つて汚なくなつて居ました。

VII.—二匹の蛙の話《つづき》

4.或日池の蛙が沼の蛙に言ひますには『君、うちへ行つて僕と一所に居よう。僕は食べ物も水もどツさり有るし、何も邪魔をするものは無し、僕の池はそれや愉快だぜ。所が此所は食べ物は少いし、水は多く無いし、それに道路が君の沼を通り抜けて居るから君は始終通行人を恐はがつて居らねやならん。』

5.そこで沼の蛙が申しますには、『有り難う。君は親切に左う言つて呉れるけれども僕は此所で充分満足して居る。水も飲むだけ有るし、通る人も僕の邪魔をしない、食べ物はどうかといへば、一昨日御馳走を食べた。君、僕は此所に久しく住みなれて居るのだらう、だから越し度くはないよ、けど、ちよいちよい遊びに来て呉れ給へ。』

1. A Drum was once boasting to a Vase of Sweet*¹ Herbs in this way: "Listen to me! My voice is loud and can be heard far off. I stir the hearts of men so that when they hear my bold roaring, they march out bravely to battle.*²

2. The Vase spoke no words, but gave out a fine, sweet perfume, that filled the air, and seemed to say: "I cannot speak, and it is not well to be proud, but I am full of good things that are hidden within me, and that gladly come forth to give cheer and comfort. But you, you have nothing in you but noise, and you must be struck to make you give that out. I would not boast if I were you."

* 1 Stickney の原本では sweet と小文字。

* 2 Stickney の原本にはある二重引用符が脱落している。

VI.— The Wolf and the Goat.

1. A Wolf saw a Goat feeding at the top of a steep precipice, where he could not reach her. "My dear friend," said the Wolf, "be careful! I am afraid you will fall and break your neck. Do come down to the meadow, where the grass is fresh and green."

2. "Are you very hungry?" said the Goat. "And is it your dinner-time? And would you like to eat me? I think I will not go down to the meadow to-day, thank you." And she capered about on the edge of the rock, still looking down at the greedy Wolf.

3. To give a false reason is to practice deceit.

VII.— The Two Frogs.

1. 太鼓が或る時好い香のする草花を活けた花瓶に向つて、斯ういふ風に自慢を言ひました、『こら、お聞きよ。己れの声は大きくて遠くまで聞える。己れは人の心を扇動てるから、己れの大きな怒鳴りを聞くと人々は勇ましく戦争に進んで行く。』

2. 花瓶は何とも物を言はなかつたが、其所いら一ぱいになる様な誠に好い香を放つて、斯う言ふ様でした、『私は話は出来ません、それに威張るのは善くありません。けれども私は私の中の方には善い事が一ぱい有ります。そして其の善い事は喜んで出て来て人様を喜ばせ且つ慰めます。所が貴下はどうです、貴下はドンドン騒ぐ事より外に何ンにも知らない、そして貴下に其喧しい声を出させるには、貴下は打たれなければならない。若し私が貴下であつたら、自慢はしなかつたでせう。』

VI.— 狼と山羊との話。

1. 山羊が峻しい崖の頂で草を食べて居るのを狼が見ましたけれども、其の傍へ行けなかつたので狼が申しましたのには『やあ、山羊さん気をお付けなさい、落ツコツて頸を挫くといけない。下りてらツしやい、新しい青草の生へて居る草原へ。』

2. 山羊は答へて言ひますには『貴下は御腹が減りましたか。今貴下の御飯時なんですか。それで妾をめしあがり度いのですか。有り難う御座いますが今日は妾は下りますまい。』

3. そして山羊はなほも欲張の狼を見下ろしながら、崖の縁を跳ね廻つて居ました。

4. 虚偽の口実を言ふのは人を欺くに同じだ。
* 英文の 2 が和文では 2、3 に分かれている。

VII.— 二匹の蛙の話。

them.

6. After a few days the owner of the field came again, and the eager birds listened to get more news for their mother.

7. "Since our neighbours have not come," the farmer said, "go and ask your uncles and cousins to come and help us, for our wheat is ready to harvest."

8. "We must move now! we must surely move!" said the young Larks, "or the reapers will come and kill us all."

9. "Not yet," said the mother; "the man who only sends to his friends to help him is not to be feared; but watch and listen, if he comes again."

10. And by and by he came. Seeing the wheat so ripe that it was shedding its grain, he said, "To-morrow we will come ourselves and cut the wheat."

11. And when the birds told this to their mother, she said, "It is time now to be off, my children, for the man is in earnest this time. He no longer trusts to others to do his work, he* means to do it himself."

Self help is the best help.

* he は Stickney の原本では but とある。

第二卷第六号 (明治四二年六月一日)

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

(第 六)

長谷川元吉

V.—The Drum and the Vase of
Sweet Herbs.

V.—太鼓と花瓶との話。

6. 二三日経つてから農夫が復た来ましたので、子雲雀は母鳥にまた話さうと思つて、熱心に耳を傾けて聞いて居ました。

7. すると農夫が申しますには「麦はもうすツかり実つて刈り取れるのに近所の人達が来ないから叔母様や従兄弟の所へ行つて手伝に来る様に頼んで呉れ」。

8. 「ひツこじ引越しなくちやならない、もう、どうしても引越しなくちやならない。そうしなけや刈手が来て私等をみんな殺してしまふ」と子雲雀は申しました。

9. すると母鳥は「まだ大丈夫です。手伝を呼びにやる様な人は恐はいもんぢや有りません。だが、もし復た来たらば何う言ふかよく気を付けて聞いてお置き」と申しました。

10. それから程なく農夫が来ましたが、麦の粒が溢れる程熟して居たので、「明日は私等が自分で来て刈らう」と申しました。

11. 子雲雀が此を母鳥に話しますと、母鳥は申しますには「さあもう越すべき時ですよ、今度は農夫は真面目だから。あの男はもう自分の仕事を人にまかして置かないで自分でする考なんです。」

自助は最良の助である。

第二卷第四号（明治四二年四月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

（第 四）

長 谷 川 元 吉

IV.— The Lark and Her Young Ones.

1. A Lark had made her nest in Spring in a field of young, green wheat. Her little ones had been growing larger and stronger all the Summer, while the wheat grew taller and closer about their home.

2. As Autumn drew near, the young birds were almost old enough to fly, and the wheat was nearly ripe.

3. One day the owner of the wheat-field came by, and the little Larks heard him say to his son, "Here will be a fine harvesting of wheat. I must send to all my neighbours to come and help me gather it in."

4. This startled the birds. They could hardly wait for their mother to come home to move them to a place of safety.

IV.—雲雀と子雀雲(ママ)の話

1.或る雲雀が、春のうち、まだ若くて青い小麦畑に巣を造りました。其の子雀雲(ママ)は夏中だんだん成長しましたが、畑の麦も追々伸びて雲雀の家のまはりへすんずん詰めかけて来ました。

2.秋が近くなつて、小雲雀はもう大概飛べる様になり、麦も余つ程実りました。

3.或る日畑の持主がやつて来て、其の息子に向つて『これや麦がうんと穫れるよ近所の人に皆刈入れの手伝に来て貰ふ様に使をやらねばなら(ママ)ぬ』と言つたのを小雲雀が聞きました。

4.此を聞いて小雲雀は驚愕しまして、母鳥が帰つて安全な場所へ移して呉れるのを待ち兼ねて居ました。

第二卷第五号（明治四二年五月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

（第 五）

長 谷 川 元 吉

IV.— The Lark and Her Young Ones.

5. "There is no need for moving yet, my children," said the mother. But when she left them, as usual, the next morning, she charged them to listen to what the farmer said, if he came again, and to remember so as to tell her exactly what it was, when she came back to

IV.—雲雀と子雲雀との話(つづき)

5.「お前達、まだ移るに及びません」と申しました。けれども其の翌朝、母鳥が平常の如く、出掛ける時に「農夫が復た来たらば、何と言ふかよく聞いてすツかり覚えて居て、私が帰つた時教へて呉れ」と言ひ付けました。

III.— The Dog and His Shadow.

1. A Dog once had a nice piece of meat for his dinner. Some say that it was stolen, but others* that it had been given him by a butcher, which we will hope was the case.

2. Dogs like best to eat at home, and he went trotting along with the meat in his mouth, as happy as a king.

3. On his way there was a stream to cross, and as the water was still and clear, he stopped to take a look at it. What should he see, as he gazed into its bright depths, but a dog as big as himself, looking up at him, and lo ! the dog had meat in his mouth.

4. "I'll try to get that," said he ; "then what a feast I shall have." As quick as thought he snapped at the meat, but in doing so he had to open his mouth, and his own piece fell to the bottom of the stream.

5. Then he saw that the other dog had lost his piece, too. He went sadly home. That day he had only his thoughts to dine upon. What do you think they were?

* Stickney の原本では others の後にコンマがある。

III.—犬と其の影との話

1.或る時犬が旨い肉を一片持つて居て御飯の時の御馳走にしようと思つて居ました。其れは犬が盗んだのだと言ふ人も有りますが、又肉屋で貰つたのだと言ふ人も有ります。買つたのならば結構です。

2.犬といふものは自分のうちで食べるのも最も好ます。それで其の犬は肉を卿へて、王様にでも成つた様に喜びながら急いで帰りました。

3.途中に小川が有つて渡らねばならなかつたが水が余り澄んで居るので犬は立ち止まつて流れを一寸覗いて見ました。ぴかぴか光る水をぢツと見詰めると、其れはまあ丁度自分と同じ程の大きい犬が自分を見上げて居ます、そして見給へ、其犬は肉を卿へてるぢやありませんか。

4.『どれ彼の肉を取つてやらう。そうすればや大変な御馳走が食べられる』と言つて、犬は矢庭に其肉に喰ひ付かうとしました。けれども其うするには口を開けなければならなかつたので、自分の卿へて居た肉が川底へ落ちてしまひました。

5.そこで彼は、もう一匹の犬も肉を無くした事が解りました。そしてしほれて家へ帰つて行きました。其日は此の犬は大層御馳走を食べました……だが御馳走といふ考を食べたので本当の食べ物では無かつたのです。あなた方は此の考は何なものだと思ひますか。

Coming closer to the Lamb, he said.*² "You little wretch, if it was not you, it was your father; so it's all the same," and he pounced upon the poor Lamb, and ate her up.

* 1 第二号で「him は her の誤植」と訂正する。Stickney の原文でも「him」。

* 2 Stickney の原本ではコンマ。

『馬鹿野郎、其れや貴様で無かつたら、貴様の親父だつたんだ。だから、何つちでも同んなじだい』。と言つて、不憫な仔羊を攫み捕つて、食つてしまひました。

第二卷第二号（明治四二年二月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

（第 式）

長谷川元吉

8. When people mean to do bad and cruel things, they can easily make excuses for it.

8. 悪い残酷な事を為ようと思へば容易に其の口実を拵へられるものである。

II.— The Fox and the Lion.

1. A little Fox was out playing one day, when a Lion came roaring along. "Dear me," said the Fox, as he did behind a tree, "I never saw a Lion before. What a terrible creature! His voice makes me tremble."

2. The next time the Fox met the Lion, he was not so much afraid, but he said to himself.* "I wish he would not make such a noise!"

3. The third time they met, Fox was not frightened at all. He ran up to the Lion, and said, "What are you roaring about?" And the Lion was so taken by surprise, that he walked away without saying a word.

II.— 狐と獅子との話

1. 或る日小狐が外で遊んで居ると獅子が咆哮ながら遣つてきました。狐は木の陰へ隠れて『オヤオヤ、己れは此れまで獅子といふものを見た事が無かつたが、まあ恐ろしい奴だ、彼奴の声を聞くと体が戦慄へる』と申しました。

2. 其の次に狐が獅子に出遭つた時には其んなに恐怖がらないで「彼んな大きな声をしなけれどやいいのに」と独語を言ひました。

3. 三度目に遭つた時には狐はちつとも驚きませんでした。づかづか獅子に近寄つて『お前は一体何を咆えて居るのか』と申しました。すると獅子はあんまり不意を食らつたので一語も言はずに逃げてしまひました。

【前号正誤】 原文2.第二行himはherの誤植。

* Stickney の原本ではコンマ。

『英語之日本』

第二卷第一号（明治四二年一月一日）

ÆSOP'S FABLES.

いそつぶ物語詳解

（第 壱）

長 谷 川 元 吉

狼と仔羊との話

1. One day a Wolf and a Lamb happened to come at the same time to drink from a brook that ran down the side of the mountain.

2. The Wolf wanted very much to eat the Lamb, but meeting him^{*1}, as he did, face to face, he thought he must find some excuse for doing so.

3. So he began by trying to pick a quarrel, and said angrily,—

"How dare you come to my brook, and muddy the water so that I cannot drink it? What do you mean?"

4. The Lamb, very much alarmed, said gently "I do not see how it can be that I have spoiled the water. You stand higher up the stream, and the water runs from you to me, not from me to you."

5. "Be that as it may," said the Wolf, "you are a rascal all the same, for I have heard that last year you said bad things of me behind my back."

6. "Oh, dear Mr. Wolf," cried the poor Lamb, "that could not be, for a year ago I was not born."

7. Finding it of no use to argue any more, the Wolf began to snarl and show his teeth.

1.或る日図らずも狼と仔羊とが山を流れる小川の水を飲みに来合せました。

2.狼は大変仔羊を食ひ度かつたけれども、まさか顔を合せて見ると、何か其の口実を掩へねばならぬと思ひました。

3.そこで、先づ喧嘩を吹つ掛けようとかいつて、声荒く、『よくも貴様は己れの川へ来て、斯んなに水を濁らしたな、己れは飲めやしない。一体何ういふ積りだ。』と言ひますと、

4.仔羊は喫驚して、やさしく申しますには『何うして私が水を濁らしたといふ事が有りませうか。貴君は私よりも川上に立つて入らつしやるから、水は貴君の方から私の方へ流れて來るので、私の方から貴君の方へ流れるのぢや有りませんもの』。

5.『其れやさうとしても、貴様はやつぱり悪る者なんだ。何故ツてば、貴様は去年己れの居ない所で悪口を言つたそうだぜ。』と狼が申しました。

6.可愛相に、仔羊は叫んで、『あら、まあ、狼さん。其んな筈は有りません。私は一年前には未だ生れて居なかつたんですから』。と言ひました。

7.もう議論しても無益だと知り、狼は歯を剥き出して唸り出し、仔羊に近寄りながら、